

日本方言研究会

第 117 回

研 究 発 表 会

発表原稿集

▼午前の部 10 時 00 分～11 時 50 分

- 1) 岐阜県西美濃の若者の LINE チャット会話で使用する方言……………MOLARIUS Milla… 1
- 2) 広島県呉市豊島方言における漬物語彙「コーコ」の
指示対象の範囲及び典型性—生業差に着目して—……………研裕太… 9

▼午後の部 13 時 30 分～17 時 10 分

- 3) 滋賀県長浜市方言における素材待遇語(ヤ)ンスの通時的考察……………坪井菜央…17
- 4) 島根県出雲方言における「動詞非過去形+ダ」とノダ文……………野間純平…25
- 5) 現代津軽方言における言語内的・外的要因による清濁対立の分析……………CHICO Sayumi…33
- 6) 滋賀県大津市方言のウ音便と母音長交替……………佐々木冠…41

付 録

- 方言関係新刊書目 ……………49
- お知らせ ……………奥付

令和 5 (2023) 年 10 月 21 日 (土) 10 時から

オンライン

日本方言研究会会則

昭和 62 年 5 月 22 日 制定

平成 30 年 6 月 16 日 改定

1. 本会は日本方言研究会（Cercle dialectologique du Japon : Dialectological Circle of Japan）と称する。
2. 事務所は日本国内におく。その場所は別に定める。
3. 本会は、日本方言研究の促進と研究者相互の連絡を目的とする。
4. 本会の事業は、(1) 年 2 回の研究発表会の開催、(2) 機関誌の発行、(3) その他、とする。
5. 会員は、日本の方言研究に関心を持ち、本会の活動に積極的に参加するものとする。このうち、本会からの情報の提供を受ける個人・団体を連絡会員、機関誌を定期購読する個人・団体を購読会員とする。手続きは別に定める。
6. 役員としては、世話人 12 名をおく。人選は世話人会が行う。世話人の任期は 4 年とし、2 年ごとに半数を改選する。世話人の 2 期重任は認めない。ただし 2 年後の再任は妨げない。
7. 本会の運営のために次の委員会をおく。委員会は世話人と世話人外の委員で構成される。

研究発表会委員会、編集委員会、総務委員会

研究発表会委員会は研究発表会に関する業務、編集委員会は機関誌に関する業務、総務委員会は他の委員会の管掌する業務以外のすべての業務を担当する。委員の任期は 4 年とし、同一の委員会における 2 期重任は認めない。必要に応じ、委員会を臨時におくことができる。その構成と任期は別に定める。

8. 経費は、(1) 会費、(2) 寄付金その他、でまかなう。会費の額等は別に定める。
9. 会則の改定手続きは、その都度定める。

世話人 *新井小枝子・*大橋純一・*小川俊輔・*小西いずみ・佐々木冠・*澤村美幸・
下地理則・*高木千恵・竹田晃子・津田智史・中西太郎・原田走一郎
(*は 2025 年 5 月まで、無印は 2027 年 5 月まで)

研究発表会委員 *大橋純一（委員長）・*高木千恵（副委員長）・佐々木冠・津田智史・
*久保博雅・坂喜美佳・又吉里美・*三樹陽介
(*は 2025 年 5 月まで、無印は 2027 年 5 月まで)

岐阜県西美濃の若者の LINE チャット会話で使用する方言¹

MOLARIUS Milla²

1. はじめに

本研究の目的は、岐阜県西美濃方言を母方言とする若者の LINE チャット会話を対象に、方言・標準語が使用される文法項目、語彙、若者言葉を包括的に分析し、その特徴を明らかにすることである。西美濃の若者による LINE チャット会話で使われることばは、カジュアルなやりとりということを考えると方言(つまり、話者にとっての「日常的な話し言葉」)が使われることが予想される。一方、文字コミュニケーションという点からは、特に、コンピュータ媒介コミュニケーション(Computer-Mediated Communication: CMC)研究の立場から見れば、文字変換の問題などもあることから、標準語(書き言葉・話し言葉)の使用・ヴァーチャル方言やエセ方言の使用が予測される(2節参照)。そうしたことをふまえて、本研究は、西美濃方言話者の若者が LINE チャット会話でどのような日本語を使うのかをデータから実証的に明らかにすることを試みる。本発表では文法項目における方言使用に注目し、その結果から、話者が、方言を多用するタイプと標準語を多用するタイプに分けられることを指摘する。そして、方言優位の話者グループが、構文的な環境、話題の重大性、標準語の影響、個人差、コミュニケーション媒体の影響によって方言形/標準語形を選んでいることを示す。加えて、方言が親しい相手との会話の親密コード(田中 2011)になることについても考察する。

2. 先行研究と問題のありか

LINE チャット会話は、おもに CMC 研究の分野で扱われてきた。CMC 研究では、電子機器を介したやりとりで使用される言語の特徴を明らかにする(Androutsopoulos 2006: 420)ことを目的としており、LINE チャットの分析は、主として表記上の特徴に注目してなされることが多かった(加納他 2017、西川・中村 2015 など)。Herring & Androutsopoulos (2015:127)は、CMC 研究の中でも言語・言葉遣いに注目するものをコンピュータ媒介談話(Computer-Mediated Discourse CMD)研究と呼んで区別している。田中(2011, 2014:37)による「打ち言葉」の研究なども、CMD 研究の中に位置づけられるだろう。

CMD のうち、特にチャット会話の中に現れる方言に注目した研究として、三宅(2006, 2018a, b)、田中(2011)が挙げられる。三宅(2006: 24)は携帯メールにおける方言

¹ 本発表の内容は、発表者の修士論文 *Gifuin Länsi-Minon alueen nuorten käyttämä murre pikaviestikeskustelussa* (岐阜県西美濃の若者のインスタントメッセージ会話で使用する方言 (2018 年、ヘルシンキ大学 <http://hdl.handle.net/10138/277540>) の一部に基づくものである。

² モラリウス、ミッラ (大阪大学大学院研究生) u585144h@ecs.osaka-u.ac.jp

の機能について、遊び感覚でも使用され、親しさを表していると述べている。また、田中(2011)はチャット会話には話者自分の母方言、いわゆる本方言のほかにヴァーチャル方言のジモ方言、ニセ方言が使われると分類している。ジモ方言は話者の出身地の方言ではあるが、普段の会話では話者が使用しない方言である。ニセ方言はエセ方言(三宅 2018b)とも呼ばれる話者自身の母方言でない方言のことである。

LINE チャット内の方言使用に関して、方言が日常的に使われる地域社会の若者を対象にした研究は、橋谷(2018)や長谷川(2023 予定)のほかは見当たらない。橋谷(前掲)はポライトネスの観点から場面によって丁寧体へのアップシフトが行われることを指摘し、また長谷川(前掲)ではLINE チャットにおけるスタイル切り換えに注目し、会話相手や発話内容によって標準語へのシフトが起きたことを明らかにした。

先行研究の多くは意識調査に基づいており、具体的な方言使用の記述は長谷川(2023 予定)にみられるのみである。また、話者の個人差を扱う研究は見当たらず、CMD において方言話者がどのような言語使用をするのかは未だ明らかでない。そこで本研究は、方言話者のLINE チャット上での言語使用を詳細に記述し、文法、語彙のほか、LINE チャット特有の省略や若者ことばにも注目しつつ、西美濃の若者のLINE チャット上の方言使用の実態を明らかにする。本発表では主に文法項目に焦点をしばって分析・考察する。リサーチクエスションとして以下の3つを扱う。

- 1) 西美濃方言話者はLINE でもデフォルトの言語として方言を使用するのか
- 2) 若者はチャット会話においてどのような方言変異を使用しているのか。
- 3) チャット会話における方言使用には、個人差が見られるか。

3. 調査概要と分析の方法

対象とするデータは、2016-2017 年に集めた4組の一対一の合計3,585 通のメッセージ⁴ (msg)、55,267 字からなるLINE チャット会話である。チャット会話を研究対象に

表1 LINE チャット会話データ詳細

会話 ID	L1		L2		L3		L4	
収集期間	2016/1-2016/10		2014/12-2017/8		2016/7-2017/8		2017/9-2017/11	
会話 msg 数	806		2158		431		189	
話者 ID	A	B	C	D	C	E	H	I
msg 数	375	431	777	1381	211	220	105	84
字数	7445	5083	11235	19479	4045	5521	929	1530
話者の関係	姉妹		幼馴染		新友人 ⁵		姉妹	
出身地	大垣市	大垣市	養老町	養老町	養老町	岐阜市	大垣市	大垣市
現住地	同上	県外	同上	同上	同上	同上	同上	同上

³ベルギーでのオランダ語を扱う Vandekerckhoven & Nobels (2010)は個人差も取り上げているが、日本国内に限らず、海外のCMD 研究でも個人差を扱うことが少ないようである。

⁴一つの吹き出しを一つのメッセージと数える。

⁵C・Eはチャット会話開始の際、知り合ったばかりである。なお、Cは早くDと同じような普通体の方言形使用に切り替えるが、Eは年上のCに対してそのまま丁寧体を使用する傾向がある。

することで、親しい間柄による長期間連続して行われた自然なやりとりを研究することができ、観察者のパラドックス(Labov 1972:209)も起こらないというメリットがある。本研究では最も長いチャット会話は3年間継続して行われていた。メッセージの送り手(話者)は、西美濃方言を母方言とする20-24歳の女性7名である(表1参照)。

本研究では、データを定量的および定性的に分析し、研究手法としてコンピュータ媒介談話分析(CMDA)と伝統的な記述的方言研究手法を応用した。西美濃の伝統方言については杉崎・植川(2002)、平山編(1997)、山田(2017)を参照した。若者がチャット会話において使用する方言形および書き言葉的／話し言葉的標準語形を対照させ分析を行った。本発表では、コピュラ・推量形式(ダ系／ヤ系)、接続助詞、動詞のアスペクト形式、否定形を取り上げる。

4. 分析結果

まず、全体の結果を図1に示す⁶。図では、分析対象とした項目に現れた方言形と標準語形の使用割合(%)を話者別に整理している。話者のうち、A,B,C,D,Hの5人は基本的に方言形を多用し、E・Iは標準語形を多用している。以下では方言優位の5人を「方言グループ」とし、このグループに注目しつつ、結果を詳しく見ていく。

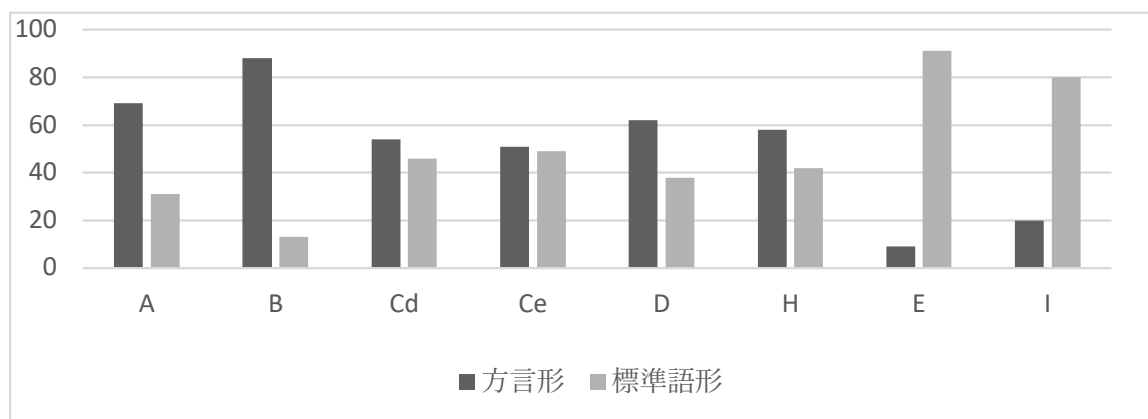


図1 話者間の方言形と標準語形の使用

4.1. ヤ系・ダ系の使用

コピュラの肯定形の方言形「や」「やった」と標準語形「だ」「だった」、推量形式の方言形「やろう」と標準語形「だろう」「でしょう」の使用を図2にまとめた。

図2から、方言グループでは方言形のヤ系がよく使用されているものの、標準語形も使用されていることがわかる。方言グループがヤ系を取るかダ系を取るかに、①活用形、②構文的な環境、③定型表現の3点がかかわる(表2)。まず①については、ヤ系はタ形「やった」において圧倒的に多く使用されている。「だった」の2例はCによるものだが、そのCにおいても「やった」は12回使用されている。

⁶Cd・Ceは、話者Cの結果を会話相手(話者D、E)ごとに分けて示したものである。以下では、CdとCeを合わせてCとして示すことがある。

②の構文的な環境については表 1)～3)としてまとめた。それぞれの例を挙げる。

例 1 C: 約束やねっ♡ (終助詞)

例 2 C: あ、
退会したんや (笑)
(ノダ)

例 3 C: ウチ
も初めてやで (笑)
(接続助詞)

例 4 C: いろ
んな人傷つけずに生
きてる人なんていな
いんだから!
(接続助詞)

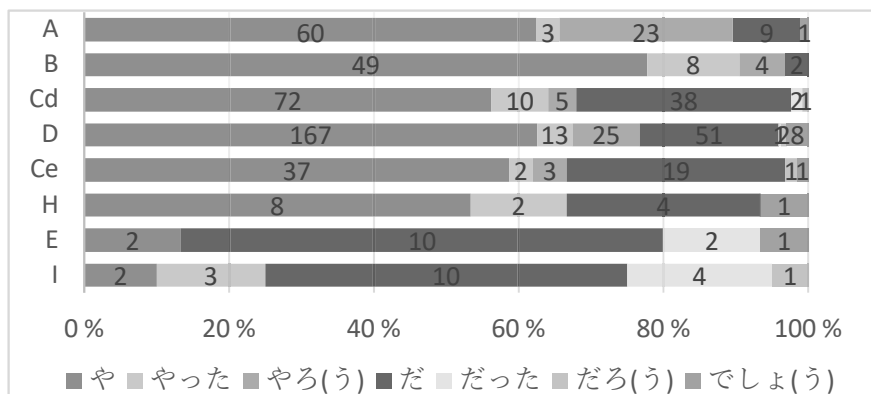


図2 コピュラの肯定形の使用

③定型表現のほ

とんどは「指示語+コピュラ+終助詞」の形をとり、応答表現で、反応を示している。例えば、「そうなんや」は30回も現れる一方、「そうなんだ」は使用されない。だが、「そーやね」と「そーだね」はどちらも使用される。

例 5 C: せやで!! (笑)

例 6 C: そーだね (笑)

次に、コピュラのヤ系・ダ系の否定形を表3にまとめた。C・Dだけは方言形と標準語形を併用しているが、使い分け方に明らかな傾向は見られない。

確認要求表現には方言形「やん」「やない」と標準語形「じゃん」「じゃない」が使用されている。

知識確認要求の「やん」と「じゃん」を表4にまとめた。圧倒的に多く使

用されているのは「やん」である。標準語形「じゃん」はC・Dに1回のみ現れる。方言形「やん」と標準語形「じゃん」の使い分けには会話内容に関わるようにみえる。Dが標準語形「じゃん」を利用するのは憤慨をしている時であり(例7)、Cもも

表2 ヤ系・ダ系

項目		方言 (や)	標準語 (だ)
0) タ形		34	2
1) 後続する 終助詞	な(一)	43	6
	ね(一)	12	10
	わ(一)	14	5
	よ(一)	7	17
	お(一)	6	1
	て	5	-
2) 「のだ」 形式の一部	(な)ん	77	9
3) 後続する 接続助詞	で	53	-
	から	10	13
	けど	43	12

表3 コピュラの否定形

		A	B	Cd	D	Ce	H	E	I
方言	やない	-	-	2	4	-	-	-	-
	やなく(て)	-	-	0	1	-	-	-	-
	合計	-	-	2	5	-	-	-	-
標準語	じゃない	1	2	2	2	-	1(じゃね)	1	1
	じゃなく(て)	0	1	2	0	-	0	0	0
	合計	2	3	4	2	2	1	1	1

らった写真の返事で「、、、」を使用し抵抗感を示していると思われる(例8)。一方、全員において「やん」はプラス的感情の発話に現れ、ビックリマークや「笑」の字でプラス的感情を表している(例9・10)。

例7 D 結局そんだけのもんってことじゃんあたしの存在なんて

例8 C テルマエロマエじゃん、、、

例9 C おもしろいやん (笑)

例10 D お!ええやん!!

ただし、Dは「やん」をマイナス感情を伴う発話に2回使用し、不満を表している。加えて、データでは「じゃん」は2回しか現れないことから、確実な使い分けについては言いにくいと思われる。

例11 D やっぱり女の子としてはいかんといて～とか言ってほしいやん

例12 D [略] あたしの[誕生日]は完全スルーやん?

表4 確認要求表現

		A	B	C	D	H	E	I	合計
方言形	やん	6	13	12	14	2	1	2	50
	やん+な・ね	-	-	-	3	-	-	-	3
標準語	じゃん	-	-	1	1	-	-	-	2

4.2 接続助詞

接続助詞で方言形と標準語形の対立が成立する接続助詞「で」と「から」について、表5にまとめた(用例は例3と例4を参照)。Bは「から」を一切使用せず、全ての原因・理由を「で」で表している。C・Dが「だから」を使用するのは、真面目な恋愛話をしているときや、不満、助言、悲観を表している時がほとんどである(例13・14)。Aの「だから」も子供の病気について語るときであり、真剣な気持ちに結びつくと言えよう。すなわち、方言グループにおいて標準語形が有標であり、話題の真剣さを示していることもあると思われる。なお、文頭・単独の「で」「やで」の使用は17回、「だから」は2回現れた。

例13 D 今だから言うけどさ/CもXちゃんもYも/割とみんなひどいよね

例14 C もう過ぎたことを悔やんでも戻れないんだからくよくよ考えるのはやめとき

表5 接続助詞の使用

	A	B	C	D	H	計	合計
用言で	3	7	-	31	1	41	94
体言やで	4	8	16	25	-	53	
用言から	8	-	22	40	1	71	91
体言だから	1	-	4	6	-	10	
体言やから	-	-	1	9	-	10	

4.3. アスペクト形式

アスペクト形式(継続態・結果態)の非過去形には、話し言葉の標準語のテル形と、方言形のトル形が使用される。書き言葉的な標準語のテイル形の使用は1回みられるが、冗談・言葉のリズムによって使用されたのではないと思われる(例15)。

例15 A 中華料理のなんか(笑)／を／作ろう／と／思っている／よ／(笑)
伝統方言の継続態「よる」(行きよる)はDによって1回のみ使用されている。

図3に示すとおり、話し言葉の標準語「テル」の方がよく使用されているが、Bだけは方言形のみを使用している(例16)。

例16 B 笑つとったよー(*'ー*)

スマートフォンでメッセージを打つとき、トル形やトッタ形は標準語の話し言葉形より文字の変換がうまくいかないことから手間がよりかかるため、Bが方言形のみ使用することは極めて意識的に行われていると考えられる。

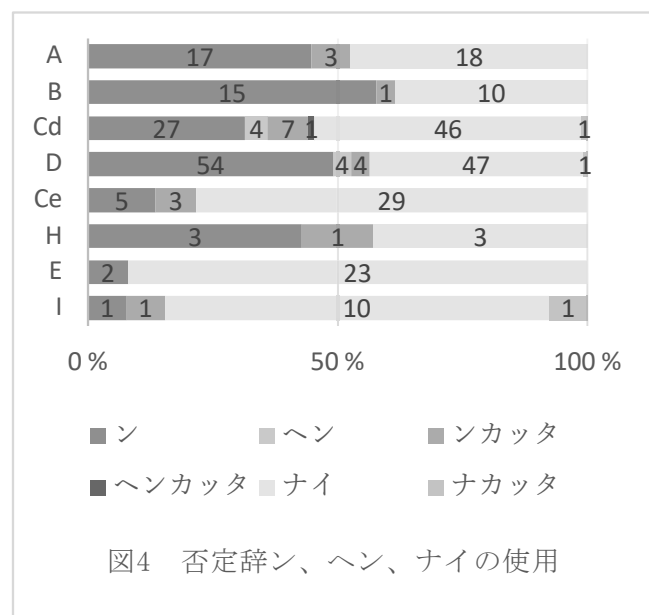
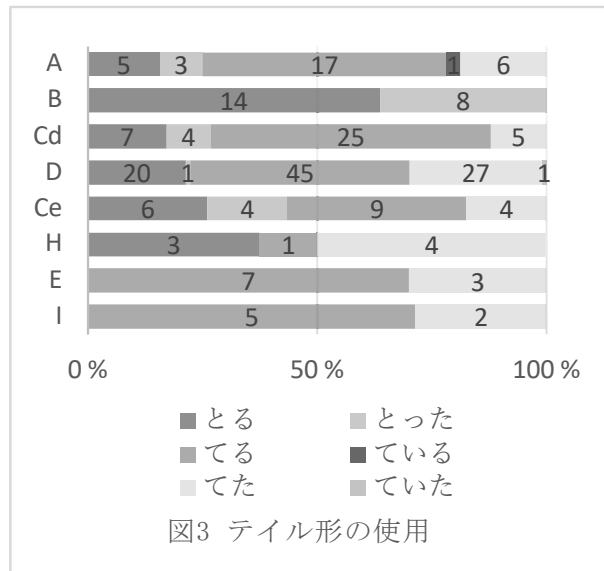
4.4. 動詞否定形

データの中では動詞否定辞として方言形のン、ヘン、標準語形のナイが使用されている。図4において、ヘンの使用が非常に少ないことに注目する。ヘンの合計9回の使用のうち、7回が可能形である(例17)。

例17 C ちょっとしかおれへん
ねや(ノリ)

方言グループにおける否定辞の選び方について、構文的な環境によってどちらの変異が使用されているかを表6にまとめた。無生物の非存在には形容詞の「ない」のみが使用されているが、有生生物の非存在には方言の「おる」と標準語の「いる」の否定形が使用されている。アスペクト形式では標準語形の方がよく使用されているが、方言形も使用される(例18、19)。

例18 D でもお昼も食べとらんし



例 19 D 火のヤツはもっとらんから名前覚えてないww⁷ (ゲームについての話)
可能形におけるンの例を 20 に挙げるが、先述のように可能系では否定辞へンも使用されている。普通の動詞非過去時制では方言形の方が使用されている (例 21)。

例 20 B 明後日は行けんかも。笑 (旅行に行けないと心配している)

例 21 C 気にせんよ (笑)

表 6 方言グループにおける否定辞の選び方について

			例	A	B	C	D	H
1	存在動詞(無生物)	標準	ない	3	7	17	14	-
		方言	あらへん	-	-	-	-	-
2	存在動詞(有生物)	標準	いない	3	-	2	-	1
		方言	おらん	-	1	3	3	-
3	アスペクト形式 (て形)	標準	行ってない	4	1	13	10	1
		方言	行っとらん	-	1	-	5	1
4	可能形	標準	行けない	1	-	7	3	-
		方言	行けん	-	1	4	6	-
		方言	行けへん	-	-	5	2	-
5	モダリティ(しないといけないなど)	標準	いけない	-	-	1	-	-
		方言	いかん	4	-	-	1	-
		方言	あかん	-	2	5	9	-
		方言	その他	-	-	2	-	-
6	認識モダリティ(かもしれないなど)	標準	かもしれない	2	-	-	-	-
		方言	かもしれん	2	1	2	3	
7	動詞非過去時制	標準	わからない	-	-	17	4	1
		方言	わからん	7	10	17	27	2
		方言	わからへん	-	-	-	2	-

5. 考察・終わりに

本研究では若者の LINE チャット会話に現れる西美濃方言を取り上げ、使用を分析した。本発表では、その中から特に文法的な面を取り上げて述べた。まず、リサーチクエスションに沿って明らかになったことを整理する。

1) 西美濃方言話者は LINE でもデフォルトの言語として方言を使用するのか。→ LINE チャットには方言が使用されているが、方言だけが使用されているわけではなく、多くの場合、標準語も併せて使用している。

2) 若者はチャット会話においてどのような方言変異を使用しているのか。→ 文法項目においては、コピュラや推量形式・確認要求形式におけるヤ系、接続助詞「デ」、アスペクト形式「トル」、動詞否定形「ン」「ヘン」などの方言形が使われていた。標準語形との使い分けにおいては、活用や構文的な環境のほか、発話内容との関わり

⁷ww は笑うの意味であり、「笑」と同じように、発話を笑顔で言っているなど、プラス的な感情を伝えている。

が窺えた。また文字変換の効率性・即時性という CMD ならではの要因 (Barasa 2010: 43, 328-329、西川・中村 2015: 49、Vandekerckhoven & Nobels 2010: 658) も考えられた。

3) チャット会話における方言使用には、個人差が見られるか。→方言形を多用するグループと、標準語形を多用するグループに分かれた。方言グループは CMD であってもあえて（意図的に）方言を選んで使用していると考えられる。すなわち、方言はただのデフォルトではなくて、親しい友人や家族との会話のための道具という機能を持っているのではないだろうか。田中 (2011: 19-20, 33-34) の指摘する方言の「親密コード」としての働きは、方言が日常的に使われる地域の若者の間でも機能すると言える。県外に住んでいる B の一貫した方言形使用についても、親密コードに含まれる帰属意識を強調する働きから解釈できるだろう。標準語グループの場合は、会話相手との関係性（自身にとっての上位者）や、CMD であることが関わっているのではないかと思われるが、これについてはさらなる検討を要する。

要するに、なぜ同じ項目で、方言形と標準語形がどちらも使用されるのかについてその理由として①構文的な環境、②会話内容、③標準語の影響（共通語化）、④話者の個人差（例えば A・B は姉妹でありながら、B の方が一貫して方言形を選んで）、⑤コミュニケーション媒体 (CMD であること) の 5 点が考えられる。本発表で扱えなかった他の言語項目の分析もふまえて今後追究していきたい。

参考文献

- (副題は省略した) 加納なおみ他 (2017) 「『打ち言葉』における句点の役割」『お茶の水女子大学人文科学研究』13:27-40／杉崎好洋・植川千代 (2002) 『美濃大垣方言辞典』美濃民族文化会／田中ゆかり (2011) 『「方言コスプレ」の時代』岩波書店／田中ゆかり (2014) 「ヴァーチャル方言の 3 用法、打ちことばを例として」『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房 37-55／西川勇祐・中村雅子 (2015) 「LINE コミュニケーションの特性の分析」『東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』16:47-57／橋谷萌賀 (2018) 「ポライトネスの観点から見る関西方言話者の LINE における言語行動」『日本学報』117:41-60／長谷川京里 (2023 予定) 「京都方言話者の LINE のことば」『阪大社会言語学研究ノート』20／平山輝男編 (1997) 『日本のことばシリーズ 21 岐阜県のことば』明治書院／三宅和子 (2006) 「携帯メールに現れる方言」『日本語学』25(1):18-31／三宅和子 (2018a) 「SNS における方言使用の実態」『文学論藻 東洋大学文学部紀要日本文学文化篇』92:42-62／三宅和子 (2018b) 「LINE の中の「方言」」小林隆編『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房 319-337／山田敏弘 (2017) 『岐阜県方言辞典』ぎふ・ことばの研究ノート 17 岐阜大学／Androutsopoulos, Jannis (2006) Introduction: sociolinguistics and computer-mediated communication. *Journal of Sociolinguistics* 10(4). 419-438／Barasa, Sandsa Nekesa (2010) *Language, Mobile Phones and Internet: A Study of SMS Texting, Email, IM and SNS Chats in Computer Mediated Communication (CMC) in Kenya*. Doctoral Dissertation. University of Leiden. Herring, Susan C. & Jannis Androutsopoulos (2015) Computer-Mediated Discourse 2.0. In Tannen, Deborah, Heidi E. Hamilton & Deborah Schiffrin *The Handbook of Discourse Analysis Second Edition Volume II*. UK: Wiley Blackwell. 127-151／Labov, William (1972) *Sociolinguistic Patterns*. University of Pennsylvania Press. 209.／Molarius, Milla (2018) *Gifin Länsi-Minon alueen nuorten käyttämä murre pikaviestikeskustelussa*. Master's Thesis. University of Helsinki. <http://hdl.handle.net/10138/277540/>／Vandekerckhove, Reinhild & Judith Nobels (2010) Code eclecticism: Linguistic variation and code alternation in the chat language of Flemish teenagers. *Journal of Sociolinguistics*, 14(5). 657-677.

広島県呉市豊島方言における漬物語彙「コーコ」の指示対象の範囲及び典型性 ー生業差に着目してー

研 裕太¹

1. 研究の背景と目的

食生活語彙は、野林（1993）、岩城（2010）、新井（2015）らによって、米飯類、餅・団子類、郷土料理など、その地域で広く食され、かつ命名・弁別の観点で豊富であるものを対象に研究が進められてきた。一方で、食生活語彙に含まれる漬物語彙は、漬物が日本人の食卓になじみ深い点、材料や調味料等の複数の観点で分析できる点から、他の食生活語彙と同様に研究の意義が見込まれるにも拘わらず、管見の限り発表者による研究（研 2022）以前には研究が僅少であった²。また、これらの先行研究における分析は多くが類義語や派生語の命名・弁別の基準を扱っており、語の意味素性と形式の結びつきを分析し、意味素性の対立によって語の意味を規定する成分分析的な手法が用いられている。食生活語彙研究はこのように、命名・弁別による体系差に注目し、構造意味論的な方法をもって行われてきたといえる。食生活語彙を含む生活語彙研究が目的とする語彙と社会・文化との相関関係の解明にあたっては、生活・生業環境のほか、対象に関する人々の認識を調査・分析した上で言語形式と照合することが重要であるといえる。そして言語と認識の関係を捉える上では、体系差に加えて人々がそのカテゴリーで何を「らしい」ものと捉えているか、という観点は有効であると考えられるが、そのような分析を行った研究は管見の限り見られなかった。

このような問題を受け、発表者はこれまで広島県呉市豊島をフィールドとして「典型性」（Lakoff1987）に着目した漬物語彙の分析を行っている。豊島は島内で生業差があり、生業差と関連して漬物語彙の「コーコ」という語³の指示対象範囲にバリエーションがみられることが特徴である。研（2023）では、漁業集落である小野浦を対象にプロトタイプ意味論的枠組みを用いた分析を試み、意味的特徴と話者の実感から考えるカテゴリーの典型性と形態的特徴を関連させたカテゴリーモデルを想定した。調査・分析の結果、最も典型的な存在と最も周辺的な存在は共通してカテゴリーを形成する上位語が語の要素として許容されず、中間的な存在のみにそれが許容されることを示した。また、同一集落内でも典型性に個人差が確認され、典型性を決定する要素の違いによって形態的特徴が異なることを明らかにし、その個人差が年代、居住地の違いなどから説明できる可能性を検討した。

本発表では比較対象として農業集落を新たに加え、生業差に注目する。生業ごとの漬物語彙「コーコ」の指示対象範囲を整理するとともに、プロトタイプ意味論的な枠組みによる漬物語彙の分析を通して、生業差が語彙の体系差だけでなく典型性の差とも関連していることを示す⁴。

2. 調査対象・調査方法

2-1. 調査地

調査地は広島県呉市に属する豊島の全3集落、山崎集落・小野浦集落・内浦集落を対象とする。図

¹ とぎ ゆうた（広島大学大学院生） m225779@hiroshima-u.ac.jp

² 広島女子大学国語国文学研究室編（1982,1989）や土井田（2001）には漬物語彙も含めた食生活語彙が辞書的に整理されているが、詳細な意味構造の分析等はなされていない。

³ 「コーコ（香々）」は、小川（1996）によると元来大根の漬物を意味する語とされる。

⁴ 本発表のうち、漁業従事者の「コーコ」カテゴリーの分析に関する箇所については、研（2023）および広島大学国語国文学会研究集会（2023年7月8日）において発表した内容を一部含んでいる。

1 に地図⁵を示し、各集落の概要を説明する。集落の概要については、調査地に関する文献（豊浜町史編さん委員会 2015）と調査協力者から得た情報をまとめている。

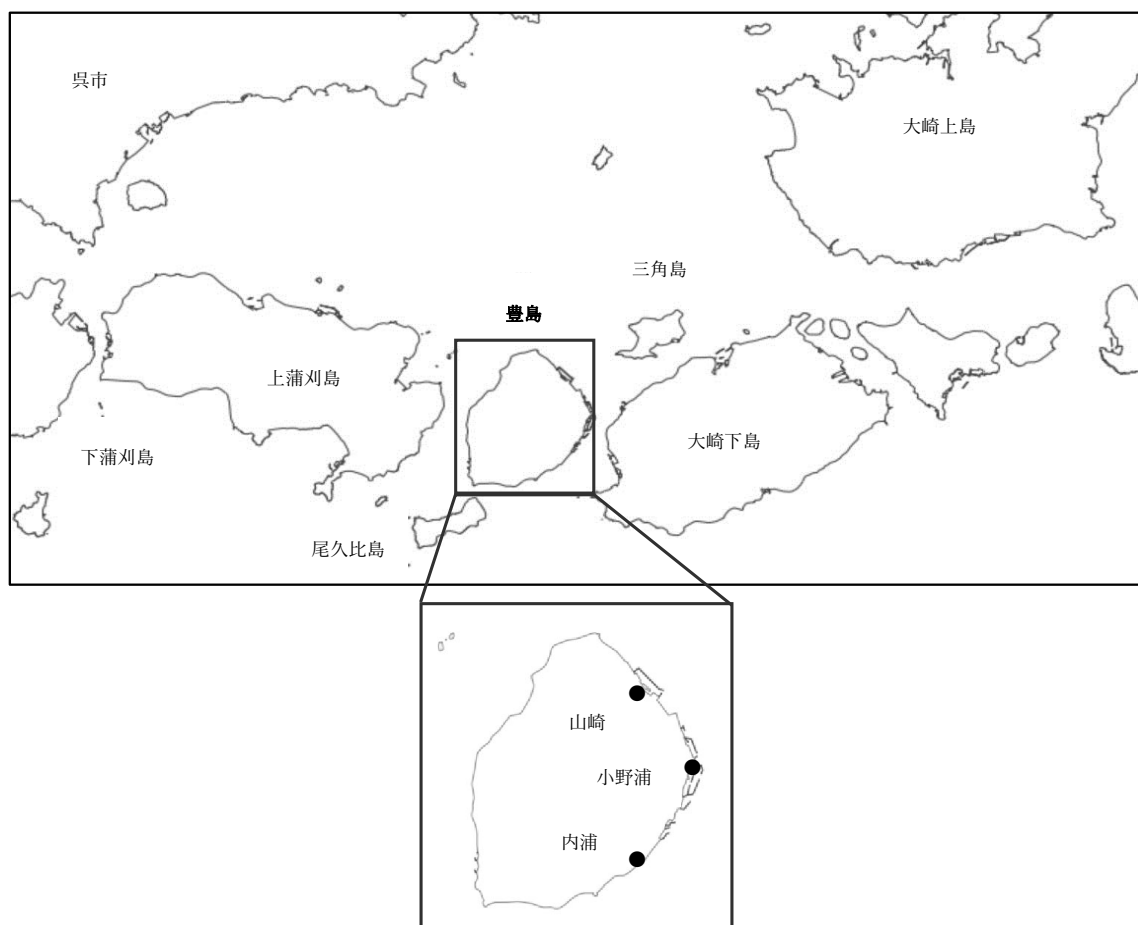


図1 広島県呉市豊浜町豊島と各集落の位置

豊島の人口は、呉市役所豊浜支所によると令和5年3月時点で947人である。

山崎は島の北側にある農業集落で、人口は約150人と推定される。多くが柑橘類を栽培・出荷している農家で、野菜類については自家で消費できる量を目安に栽培しているという。また、多くの農家が三角島や大崎上島へ出作を行い、かつては麦・芋・米などの主食類を育てていたとのことである。現在も出作を行っている農家は、柑橘類を栽培している。

小野浦は島の東側に位置している集落で、人数は推定約500人である。漁業に関しては、古くから個人による延縄漁・一本釣り漁・ひじきの養殖業などを行っている。漁の特徴として、夫婦で乗船し漁に出ることが挙げられる。なお、山の手側には「アゲ」と呼ばれる土着の農家が暮らしている。漁家で畑を所持している家は少なく、野菜は商店から購入することが多いという。

内浦は島の南側にある農業集落で、人口は約300人と推定される。山崎と同様に柑橘類農家が多く、野菜は自家用に栽培している。尾久比島へ出作を行い、柑橘類を栽培している。

⁵ 地図は国土地理院発行の「地理院地図」を使用した。

2-2. 調査協力者

調査協力者は60代～90代の老年層話者18名である。内訳は、山崎4人、小野浦9人（農業従事者2人、漁業従事者7人）、内浦5人である。以下に調査協力者を生業ごとに示す。漁業従事者については、後の議論の便宜上3つのグループに分け、備考欄にそのグループを記している。

表1 調査協力者(農業従事者)

話者番号	生年 (年齢)	性別	居住集落	生業	話者番号	生年 (年齢)	性別	居住集落	生業
A	1946 (77)	男	山崎	柑橘農家 (元公務員)	G	1944 (78)	男	内浦	柑橘農家
B	1956 (67)	男	山崎	柑橘農家 (元酒屋)	H	1945 (77)	女	内浦	柑橘農家
C	1942 (81)	女	山崎	柑橘農家	I	1932 (91)	女	内浦	柑橘農家
D	1951 (72)	女	山崎	兼業柑橘農家 (調理師)	J	1949 (74)	女	内浦	柑橘農家
E	1941 (82)	女	小野浦	兼業柑橘農家 (パン屋)	K	1934 (89)	女	内浦	柑橘農家
F	1938 (85)	女	小野浦	兼業柑橘農家 (仕立屋)					

表2 調査協力者(漁業従事者)

話者番号	生年 (年齢)	性別	居住集落	生業	備考
L	1938 (85)	男	小野浦	元漁師	グループⅠ
M	1942 (81)	男	小野浦	元漁師	
N	1953 (70)	男	小野浦	漁師	グループⅡ
O	1949 (74)	男	小野浦	漁師	
P	1939 (84)	男	小野浦	元漁師	グループⅢ
Q	1933 (90)	男	小野浦	元漁師	
R	1934 (89)	男	小野浦	元漁師	

2-3. 調査方法

2023年2月～8月にかけて計5回の調査を行った。発表者が作成した項目に基づき、名称、材料、調味料、手順等を質問した。また、扱う対象は話者が直接作ったまたは食べたことのある漬物とした。

次に、典型性に関する調査について説明する。まず「コーコと言えど何を思い浮かべるか」という質問に対する第一回答 x を典型例と仮定した⁶。 x が具体物でない場合は、具体物を答えるよう求めた。次に、他の指示物 y と比較し、「 x と y はどちらがより一般的な「コーコ」であるか」といった質問を行い、第2回答を求めた。これを全ての成員に対して行った結果を整理し、典型性を記述した。

なお、カテゴリーの上位語が各名称の形態的要素として表れるか否かが典型性と相関する可能性があるため、単純語だけではなく、複合語・名詞句の構成要素としての「コーコ」も含めて分析を行う。

⁶ Roschの一連の研究により、プロトタイプの性質は複数あることが指摘されている。その一つとしてRoschは「カテゴリーのメンバーを挙げさせた場合、中心メンバーが先に挙げられる」という性質を挙げている(Rosch,1978)。本発表ではこの性質を典型例の判断基準とした。

3. 結果と分析

本節では、漬物語彙のデータと分析を行う。紙幅の都合上、「コーコ」の指示対象範囲のみ扱う。各名称は音声データに基づいて判断し、可能な限り発音に近い形でカタカナ表記を行った。なお、本発表では名詞句相当の構造をもつ「A の B」という形式も漬物語彙に含めて分析する。

3-1. 「コーコ」の指示対象範囲の生業差

以下、生業ごとにデータを記述するが、「個人差」欄には当該形式を「コーコ」として認定した話者の番号を記した。話者全員に共通してみられた語については無表記とした。なお、指示物を「コーコ」カテゴリーに含むか否かに加え、その指示物を作るか否かについても個人差が見られた。まず、山崎、小野浦、内浦の農業従事者（話者番号 A～K：11 名）のデータを示す。

表 3 農業従事者における「コーコ」の指示対象範囲

名称	材料	調味料	作り方	個人差
ダイコンノヌカズケ ダイコンゴロコ タクアン	大根	糠	丸々干した大根を樽に入れ、糠に漬ける	
ミソゴロコ	大根	味噌	糠漬けにした大根のうち、古くなったものを味噌に漬ける	
センタクゴロコ	大根	糠 砂糖・醤油	糠漬けにした大根のうち、古くなったものを水にさらして細かく刻み、生姜と和える。または油で炒めて砂糖や醤油で煮詰める。	
オカラズケ	大根	おから	糠漬けと同じ要領で、干した大根をおからに漬ける	C,E~K
ベッタラズケ	大根	塩麹・砂糖	塩麹と砂糖を混ぜたもの、または市販のべったら漬の素で漬ける	H~K

表 2 から、農業従事者における「コーコ」の材料は大根のみを許容することが共通していると分かる。また、話者から「おから漬は糠漬けと同じ方法で漬ける」という発言が得られた。この糠漬けと工程が類似することが典型性を決定する上で関係すると考えられるが、それについては後述する。

続いて、漁業従事者（話者番号 L～R：7 名）における「コーコ」カテゴリーを整理する。漁業従事者は指示物の有無に差が顕著に見られるため、3 つのグループに分けて記述する。まず、グループ I（話者番号 L,M）は指示対象の材料に大根、きゅうり、白菜が含まれ、それぞれ糠漬けと塩漬けにする。

表 4 漁業従事者における「コーコ」の指示対象範囲（グループ I）

名称	材料	調味料	作り方
ダイコンゴロコ タクアン	大根	塩	大根に塩を振って一晩おく
センタクゴロコ	大根	塩	塩が強く効いてそのままでは食べられない大根を、水にさらしてから刻む
キュウリノシオズケ キュウリノコーコ	きゅうり	塩	きゅうりに塩を振る
ハクサイノシオズケ ナッパノシオズケ ハクサイノコーコ	白菜	塩	白菜に塩を振ってから一夜干しする
ダイコンノヌカズケ タクアン	大根	糠・塩	大根を糠床に入れる
キュウリノヌカズケ	きゅうり	糠・塩	きゅうりを糠床に入れる
ハクサイノヌカズケ	白菜	糠・塩	白菜を糠床に入れる

グループⅡ(話者番号 N,O)は材料に大根、きゅうり、なす、白菜が含まれ、きゅうり・なすは糠漬
けに、白菜は塩漬けにする。

表 5 漁業従事者における「コーコ」の指示対象範囲（グループⅡ）

名称	材料	調味料	作り方
ダイコンノヌカズケ タクアン	大根	糠・塩	生の大根を糠に入れる
ダイコンノシオズケ タクアン	大根	塩	大根に塩を振ってしばらく置く
センタクゴロコ	大根	塩	大根の塩漬けが古くなったものを水にさらして千切りし、固く絞る。
キュリノコーコ キュリノヌカズケ	きゅうり	糠・塩	きゅうりを糠床に入れる
ナスビノコーコ ナスビノヌカズケ	なすび	糠・塩	なすびを糠床に入れる
ハクサイノツケモノ ナッパノツケモノ	白菜	塩・鷹の爪	天日干した白菜を塩で漬ける
ダッキョー	らっきょう	らっきょう酢	らっきょうをらっきょう酢で漬ける

グループⅢ(話者番号：P,Q,R)は、指示対象の材料にきゅうりとなすが含まれないものである。

表 6 漁業従事者における「コーコ」の指示対象範囲（グループⅢ）

名称	材料	調味料	作り方
ダイコンノシオズケ タクアン	大根	塩	大根に塩を振ってしばらく置く
センタクゴロコ	大根	塩	塩味が強いものを水にさらし、刻む
ダイコンノヌカズケ	大根	糠	大根を糠に入れる
ハクサイノシオズケ ナッパノツケモノ	白菜	塩	白菜に塩を振ってしばらく置く

表 4～表 6 を見ると、漁業従事者における「コーコ」の指示対象範囲や語と意味の関係には差が見られるが、大根以外の野菜を「コーコ」の材料として許容することがあるという共通点が挙げられる。
このように、「コーコ」の指示対象範囲には生業差があり、漁業従事者内には個人差が見られる。

3-2. 「コーコ」の典型性の生業差

このような「コーコ」の指示対象範囲の違いに加えて、「コーコ」カテゴリーの典型例にも生業による違いが見られる。典型性の認識については、2-3 で示した方法で質問をおこなった。表 7 に回答結果を整理する。第 1 回答と第 2 回答で変化がなかった場合は「－」で示した。

表 7 典型性についての質問と回答

	話者番号	第 1 回答 (x) コーコと言えば何か	第 2 回答 より一般的・具体的なものは何か
農業従事者	A～K	大根の糠漬け	－
漁業従事者	L,M(グループⅠ)	塩で漬けているもの	大根の塩漬け
	N,O(グループⅡ)	大根の塩漬け	－
	P,Q,R(グループⅢ)	大根の漬物	大根の塩漬け

表7から、農業従事者は典型例を大根の糠漬けとし、漁業従事者は典型例を大根の塩漬けとしたことが分かる。なお、農業従事者から「塩だけの大根の漬物は作らない」という回答が得られたため、農業従事者が大根の塩漬けを典型としないのは指示物の有無によるといえる。しかし、漁業従事者は大根の糠漬けを作るにも拘わらず塩漬けを典型とすることを踏まえると、典型性の違いであるといえる。典型性に注目することによって、漁業従事者は農業従事者にとって存在しない漬物(大根の塩漬け)を「コーコ」カテゴリーに含めるだけでなく、典型例とするという点が生業間で大きく異なることが分かる。この「コーコ」の指示対象範囲及び典型性の違いは、同じ小野浦集落の中で生業の異なる調査協力者に見られたという理由から、集落差よりも生業に関する認知の差であると考えられる。

3-3. 農業従事者における「コーコ」カテゴリーの形態的特徴と典型性の相関

本節では、農業従事者の「コーコ」カテゴリーにおける典型性が、カテゴリーの成員の形態面にどのように反映されているか分析する。構成要素としての「コーコ」に着目すると、名称の形態的要素として表れる場合と表れない場合がある。後部要素に「コーコ」をとるものは「ダイコンゴーコ」「ミソゴーコ」「センタクゴーコ」、とらないものは「オカラズケ」「ベッタラズケ」である。表2の「調味料」と「作り方」の枠に注目すると、後部要素に「コーコ」をとるものは糠を使用するか糠漬けの大根を使用することから、農業従事者においては糠漬け(を前提とする)か否かが形態的な「コーコ」の有無を決定するといえる。表7から、農業従事者においては大根の糠漬けが「コーコ」の典型であるという認識が窺えること、糠漬け(を前提とするもの)の名称はカテゴリーの上位語である「コーコ」が形態的要素として許容されること、一方で糠漬け(を前提とするもの)以外の名称にはそれが許容されないことから、「カテゴリー内の成員のうち周辺的な存在の名称はカテゴリーを表す語を形態的要素にとることができない」という仮説がたつ。農業従事者において「糠漬けが典型例であり、糠漬け(を前提とするもの)以外のものは相対的に非典型的である」というモデルを想定し、上記の仮説にあてはめることで、糠漬け(を前提とするもの)以外の名称が「コーコ」を形態的に含まないことが説明できる。想定される農業従事者の「コーコ」の典型性モデルは以下ようになる。本発表では典型性モデルを示す際、典型性を複数の層として各層に番号を付す。典型例が第1層におかれ、数字が増えるに従って周辺的存在であることを意味する。

〈農業従事者における「コーコ」カテゴリーの典型性〉

- 第1層 ダイコンゴーコ
- 第2層 ミソゴーコ・センタクゴーコ
- 第3層 オカラズケ
- 第4層 ベッタラズケ

糠を使用する「ダイコンゴーコ」が第1層に、糠漬けを前提とする「ミソゴーコ」「センタクゴーコ」が第2層におかれる。糠漬けではない点で「コーコ」として典型的でない「オカラズケ」「ベッタラズケ」のうち、糠漬けと同様の工程で作る「オカラズケ」は第3層、工程が異なる「ベッタラズケ」は第4層におかれると考えられる。以上のうち、第1層・第2層と第3層・第4層の典型性の認識の違いは、形態的特徴に反映されているといえる。

3-4. 漁業従事者における「コーコ」カテゴリーの形態的特徴と典型性の相関

表7の通り、漁業従事者は共通して「コーコ」の典型的存在を大根の塩漬けと回答したが、第一回

答(x)には個人差がある。グループⅠは「塩で漬けているもの」という回答から、調味料を中心に典型を捉えているのに対し、グループⅡ,Ⅲは「大根の漬物／塩漬け」という回答から、材料も含めて典型を捉えていることが分かる。そして、このような典型の認識は形態的側面にも反映されている。

グループⅠ～Ⅲにおける構成要素としての「コーコ」の振る舞いを見ると、形態的特徴に反映される典型性の軸が異なることが指摘できる。グループⅠは塩漬けが「コーコ」の典型であり、塩漬けであることが形態的に「コーコ」を許容する条件である。一方、グループⅡ,Ⅲにおける「コーコ」の典型は大根の漬物であり、大根と形状・質感の点から近似性が低い葉物野菜は形態的要素として「コーコ」が許容されない。ここから、野菜の種類（大根との近似性）が形態的要素として「コーコ」を許容するか否かに関係すると考えられる。いずれのグループも形態的要素としての「コーコ」の振る舞いから、先の仮説が適用できる。グループⅠは塩漬けを典型例とするモデル、グループⅡ,Ⅲは大根の漬物を典型例とするモデルを想定すると、以下のようになる。グループⅢのモデルは紙幅の都合上省略するが、グループⅡの第2層を抜いたものであると理解できる。

〈グループⅠ（話者 L,M）における「コーコ」カテゴリーの典型性〉

- 第1層 ダイコンゴーコ・キュリノコーコ／キュリノシオズケ
 ハクサイノコーコ／ナッパノシオズケ
- 第2層 ダイコンノヌカズケ・キュリノヌカズケ・ハクサイノヌカズケ

第1層は塩漬けであり、それぞれの語に「コーコ」が許容される。第2層は糠漬けであり、後部要素には「コーコ」をとることができない。

〈グループⅡ（話者 N,O）における「コーコ」カテゴリーの典型性〉

- 第1層 ダイコンノシオズケ・ダイコンノヌカズケ
- 第2層 キュリノコーコ／キュリノヌカズケ・ナスビノコーコ／ナスビノヌカズケ
- 第3層 ハクサイノツケモノ／ナッパノツケモノ

第1層は大根を用いた漬物であり、「コーコ」を構成要素として許容しない。第2層はきゅうりとなすを用いた漬物であり、後部要素に「コーコ」をとることができる。きゅうりとなすびは形状と質感が(少なくとも葉物野菜と比して)大根に類似しているという特徴をもつ。第3層は最も周辺的な層であり、「コーコ」の一種だが後部要素に「コーコ」を許容しない。白菜は葉物野菜であり、大根との近似性が低いといえる。

ここまでの分析から、漁業従事者における「コーコ」の典型的存在は共通しているが、典型性を決定する軸が異なることが分かる。この違いは、第一層におかれる最も典型的な存在の形態的特徴にも反映される。グループⅠでは、農業集落と同様に「ダイコンゴーコ」という形式が許容されるのに対し、グループⅡ,Ⅲは最も典型的な大根の漬物に対して上位語を形態的要素としてとることができない。これは個別的な形態素同士の意味の重複によると考えられる。グループⅡ,Ⅲは「コーコ」の典型が大根の漬物であることを踏まえると、「コーコ」の典型的な意味と「ダイコン」という形態素の意味が重複するため、形態的に「ダイコン」と「コーコ」が共起しないと説明できる。一方で、グループⅠは塩漬けであることが「コーコ」の典型性として重要であるため、「大根」と「コーコ」の意味の重複が起こらないと説明できる。糠漬けを典型とする農業従事者においても同様の説明が可能である。

4. 指示対象範囲・典型性と生業環境との関係について

生業間に見られる指示物の有無と典型性の違いは、漁業従事者の生業環境に関係する可能性がある。まず、漁業従事者にのみ「大根の塩漬け」が存在していることについては漁業従事者の多くが遠洋漁業を行うという生業環境との関係が考えられる。遠洋漁業では正月～盆まで漁に出ており、船上での生活が非常に長い。その生活で漬物を食べることは「一晩か二晩漬けたらそのまま食べられる」という発言が得られた。塩を振って置くことで、船上で調理を介さず野菜を食べられるようになる塩漬けが、漁師にとっては最も合理的で簡単な方法であったと考えられる。このような文化的側面は漁師がもつ漬物類語彙の典型性と相関がある可能性が指摘できる。また、糠漬けについては「陸（おか）では作っていた」という発言が得られた。このような発言から、船上で生活する漁師にとっては、糠漬けは塩漬けよりも馴染みが薄かったことが窺える。大根の塩漬けの存在、また塩漬けと糠漬けのどちらを典型例とするかはこのような漁師の生業環境と関係している可能性が指摘できる。

以上に述べてきたことから、指示対象範囲からも漬物語彙と生業差の関連性は窺えるが、典型性に注目することでさらにその相関関係が明確になることが分かる。

5. 結論と今後の展望

本発表では、豊島における漬物語彙「コーコ」の指示対象範囲を整理し、カテゴリーの典型性と形態的側面との関係、典型性の認識の差と生業差の相関について述べた。分析の結果、農業従事者における「コーコ」は大根を使用したものを指し、漁業従事者における「コーコ」は大根以外の野菜を含むことを明らかにした。また農業従事者は大根の糠漬けを、漁業従事者は大根の塩漬けを「コーコ」の典型としていること、形態的特徴から「コーコ」の典型性モデルを想定することで、形態的にコーコが含まれるか否かの合理的説明が可能であることを示した。課題としては、漁業従事者における個人差の原因について明らかにできていない点が挙げられる。年代が下るにつれ食材の流通が安定したことで典型性を決定する基準が変化すると予想されるが、指示対象範囲の違いなどについてはさらなる調査が求められる。また分析において、典型性を決定する軸は複数存在しており、その一つが形態的特徴として表れていると考えられるが、そのような典型性の表し方については今後の課題とする。

【参考文献】

新井小枝子（2015）「群馬県方言における粉食に関する語彙：粉食語彙の記述的研究から粉食文化の解明へ『方言の研究』（1）pp.53-76 ひつじ書房／岩城裕之（2010）「島根県隠岐・出雲地域における餅・団子類語彙：稲作を中心としない2地点の比較から」語彙研究会編『語彙研究』（8）pp.22-31 語彙研究会／小川敏夫（1996）『漬物と日本人』日本放送出版協会／篠木れい子（1996）「食語彙を読む」『月刊 言語』25（11）pp.64-71 大修館書店／土井田京子（2001）「芸予諸島域方言の食生活語彙についての研究：豊田郡豊浜町豊島小野浦方言における食品語彙の弁別と命名に着目して」広島女学院大学修士論文／研裕太（2022）「山間部農村と海岸部漁村における食生活語彙体系の比較－高知方言の漬物類語彙に着目して－」『論叢国語教育学』（18）pp.1-13 広島大学大学院国語文化教育学研究室／研裕太（2023）「プロトタイプ意味論を用いた漬物類語彙の意味分析に向けて－豊島小野浦集落における「コーコ」カテゴリーを対象に－」『論叢国語教育学』（19）pp.1-10 広島大学大学院国語文化教育学研究室／豊浜町史編さん委員会（2015）『豊浜町史 通史編』呉市／野林正路（1986）『意味をつむぐ人びと－構成意味論・語彙論の理論と方法』海鳴社／野林正路（2009）『意味の原野 日常世界構成の語彙論』和泉書院／広島女子大学国語国文学研究室編（1982）『農業集落の食生活語彙』溪水社／広島女子大学国語国文学研究室編（1989）『漁業集落の食生活語彙』溪水社／室山敏昭（1987）『生活語彙の基礎的研究』和泉書院／Lakoff, George（1987）*Women, Fire, and Dangerous Things : What Categories reveal about the Mind*. The University of Chicago Press [池上嘉彦・河上誓作他訳（1993）『認知意味論：言語から見た人間の心』紀伊國屋書店]／Rosch, Eleanor（1978）Principles of Categorization. In E. Rosch and B. B. Lloyd (eds.) *Cognition and Categorization*, pp.27-48, Lawrence Erlbaum.

滋賀県長浜市方言における素材待遇語(ヤ)ンスの通時的考察

坪井菜央¹

1. はじめに

滋賀県長浜市方言の(ヤ)ンスは「同輩以下に対する親愛の助動詞」(井之口・福山 1951 : 535)と説明される素材待遇語である。長浜市では(ヤ)アルや(ヤ)ンスなど複数の素材待遇語が使用されるが、現在(ヤ)ンスは特に若年層の使用者が急減して失われつつある。しかし、三重県など周辺地域でも関連する待遇語が見られるように、(ヤ)ンスはかつて広い地域で使われた待遇語だと考えられる。本発表では、(ヤ)ンスの使用者が減少する中でその運用方法はどのように変化したのか、特に長浜市方言での使用の動態を通時的に考察する。

2. 先行研究と問題の所在

2.1. 滋賀県長浜市の素材待遇語とその運用方法

滋賀県長浜市の素材待遇語については、筧(1962)や酒井(2015)に記述がある。

筧(1962)によると、湖北地域²で使用される素材待遇語は(ヤ)ハル、(ヤ)アル、(ラ)ル、ナハル、ヤス、(ヤ)ンスである。この内、(ラ)ルは老人が、ナハル、ヤスは中年以上の人が多く使う。また、(ヤ)アルは湖北地域のみで使われる。

酒井(2015)は、長浜市の素材待遇語の使用(規範)意識について、待遇価値が(ヤ)ハル>(ヤ)アル>(ヤ)ンス>ヨルの順に高いこと、運用の特徴について、第三者待遇偏用の傾向は認められるが、第三者待遇場面において素材待遇語がマークする使用対象が拡大するわけではなく、第三者マーカ―としては機能していないことを述べている。

2.2. 素材待遇語(ヤ)ンスについて

近畿地方で用いられる(ヤ)ンスについて述べた研究には楳垣(1962)や藤原(1978)がある。楳垣(1962)によると、(ヤ)ンスはセラル・サセラル系の待遇語にマスがついて成立したもので、このような待遇語は滋賀や三重、奈良、和歌山など、広い地域で使われるとされる。また、藤原(1978)では、(ヤ)ンスはヤルにマスが接続して成立したもので、使用される地域は、滋賀、和歌山、三重であるとされる。このように(ヤ)ンスの成立には諸説あるが、(ヤ)ンスとそれに類する形式が近畿地方周辺部に存在することがわかる。

滋賀県で用いられる(ヤ)ンスの運用方法について明らかにした研究には宮治(1987)がある。宮治(1987)は、滋賀県内の老年層と高校生を対象にアンケート調査を行った。その結果によると(ヤ)ンスは、「上向き待遇から下向き待遇へと待遇価値が下がった」(宮治 1987 :

¹ つばい なお(関西大学大学院生) tsuboinao@outlook.jp

² 滋賀県は湖東、湖西、湖南、湖北の4つの地域からなる。湖北地域は滋賀県の北東部に位置し、長浜市はこの湖北地域に属している。また、長浜市は市町村合併によって現在の形になっており、2023年時点では湖北地域の大部分を長浜市が占めている。本稿での「長浜市」は特に断りがない限り現在の行政区画上の長浜市を指す。

46)待遇語であり、「老年層は話し相手に対しても用いるが、高校生は第三者待遇のみに限定して用いる」（宮治 1987：44）と述べられている。また、酒井(2015)では「(ヤ)ンスは農村部でおもに使用される素材待遇形式である」（酒井 2015：117）と述べられており、長浜市の中でも(ヤ)ンスの使用には地域差があることがわかっている。

2.3. 問題の所在

先行研究より(ヤ)ンスは関連するものも含めると古くから近畿地方で広く使われた待遇語であり、年を経る中で待遇価値の低下と第三者待遇偏用化が起こったと考えられる。

このように(ヤ)ンスに関する先行研究は複数あり、発表者自身も坪井(2022)で現在の若年層は(ヤ)ンスをあまり使用しないことを明らかにした。しかし、使用者が減少している現在の状況も含めて(ヤ)ンスの運用方法を通時的に考察した研究は見られない。そこで、本研究では現在の若年層の(ヤ)ンスの運用方法を明らかにし、既存の方言資料における(ヤ)ンスの記述を見ていくことで、滋賀県長浜市方言における(ヤ)ンスの使用の動態について考察する。

3. 研究方法

(ヤ)ンスに関する方言資料の記述の整理と、若年層への自記入式アンケートを実施した。

方言資料の記述の整理は本稿末尾の「参考資料」に掲載した資料を用いて行った。本研究で使用する資料は、発表者が集めた長浜市の方言に関する資料のうち、話者の生年がある程度判明しており、かつ第三者待遇偏用あるいは(ヤ)ンスの命令形について記述があるものとした。命令形に注目したのは、第三者待遇偏用についての記述がないものは命令形の有無によって対者待遇場面で(ヤ)ンスが使用できるかどうかを判断するためである。

アンケートはMicrosoft Formsを使用し、2022年6月6日から10日にかけて実施した。回答者は滋賀県長浜市出身の10～20代で、計173人(10代156人、20代17人)である。10代のアンケートに関しては、滋賀県立虎姫高等学校の協力を得て実施した。

本発表で取り上げる調査項目は3つである。まず、調査項目[1]は長浜市の若年層が使用する素材待遇語を確認するため、筧(1962)を参考に滋賀県の若年層が用いる可能性のある素材待遇語を6つ挙げた。それぞれについて「よく言う」「たまに言う」「言わないが聞いたことがある」「言わないし聞いたことがない」という4つの選択肢を用意した。

[1] 各素材待遇語の使用の有無を確認する調査項目³

1-1 先生が【イカハル(行かはる)】

1-2 先生が【イキハル(行きはる)】

³ 質問文の一部を【 】で囲んでいるが、これはハイライトしたい箇所を目立たせる意図で付けている。また、後述の調査項目[2]、調査項目[3]についても同様の意図に基づき【 】で囲んでいる。

1-3 先生が【イカール(行かーる/行かある)】

1-4 先生が【イカル(行かる)】

1-5 近所の子どもが【イカンス(行かんす)】

1-6 近所の子どもが【イキヤル(行きやる)】

調査項目[2]は(ヤ)ンスの運用方法を確認する項目である。回答の選択肢は「言う」「言わないがおかしい」「言わないしおかしい」の3つとした。

[2] (ヤ)ンスの運用方法を確認する調査項目

2-1 対者待遇場面

あなたは【 】内の人物と話しています。【 】内の人物本人に「買い物に行く？」とたずねる時、「イカンス(行かんす)」と言いますか。

→【 】本人に「買い物イカンス？」(【先生】の時のみ「イカンシマスカ？」)

2-2 第三者待遇場面

あなたは友達のAさんと【 】内の人物について話しています。「【 】内の人物はよく買い物に行く」と言う時、「イカンス(行かんす)」と言いますか。

→【 】はよく買い物にイカンス

【 】内の人物は表 1 のように設定した。

表 1 調査項目[2]の人物設定

身内		非身内		
目上	目下	目上	対等	目下
父/母	弟/妹	先生	友達 (第三者待遇場面では友達B)	後輩

調査項目[3]は素材待遇語の命令形の許容度を確認する項目である。回答の選択肢は「よく言う」「たまに言う」「言わないが聞いたことがある」「言わないし聞いたことがない」の4つとした。

[3] 素材待遇語の命令形の許容度を確認する調査項目

3-1 早く【イカンセ(行かんせ)】

3-2 早く【キナイ】

3-3 早く【コンセ】

3-4 早く【キャンセ】

3-5 早く【ゴンセ】

3-2 以外が(ヤ)ンスの命令形である。酒井(2015)において、(ヤ)ンスはハルや(ヤ)アルには存在しない命令形を持つとされており、特に「来なさい」に相当する(ヤ)ンスの命令形には 3-3、3-4、3-5 のような複数の形態が存在している。また、(ヤ)ンスの命令形の他にもナハルの命令形が変化した「ナイ」もよく使用されるため、3-2 に加えている。

4. 若年層の(ヤ)ンスの使用状況

まずアンケート調査の結果の分析により、若年層の(ヤ)ンスの使用状況を確認する。

図 1 は調査項目[1]の結果を図にしたもので、坪井(2022)に掲載したものを再掲した。

「1-5 イカンス」が(ヤ)ンスに相当する。従来長浜市では、調査項目[1]の 6 項目のうちハル、(ヤ)アル、(ヤ)ンスが用い

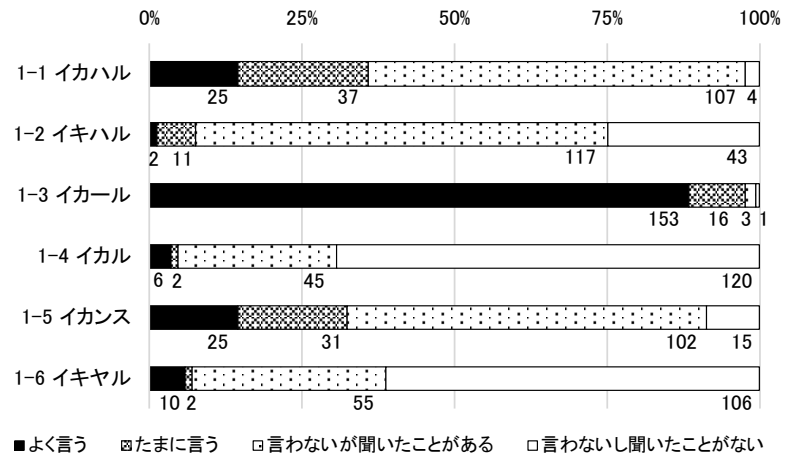


図 1 長浜市若年層の素材待遇語の使用意識(坪井 2022)

られるとされてきた。しかし、調査項目[1]ではほぼ(ヤ)アルのみが用いられる結果となり、(ヤ)ンスを「よく言う」「たまに言う」と回答した人は全体の 32.4%(56 人)にとどまった。一方「言わないが聞いたことがある」と回答した人が 60.0%(102 人)おり、「言わないし聞いたことがない」と回答した人はわずか 8.7%(15 人)であることから、(ヤ)ンスは若年層においても広く認知されていることがわかる。

次に、調査項目[2]の結果から(ヤ)ンスの運用方法を分析する。本研究では、図 2 のように(A)～(I)までの 9 つの待遇型を設定して分析を行った。

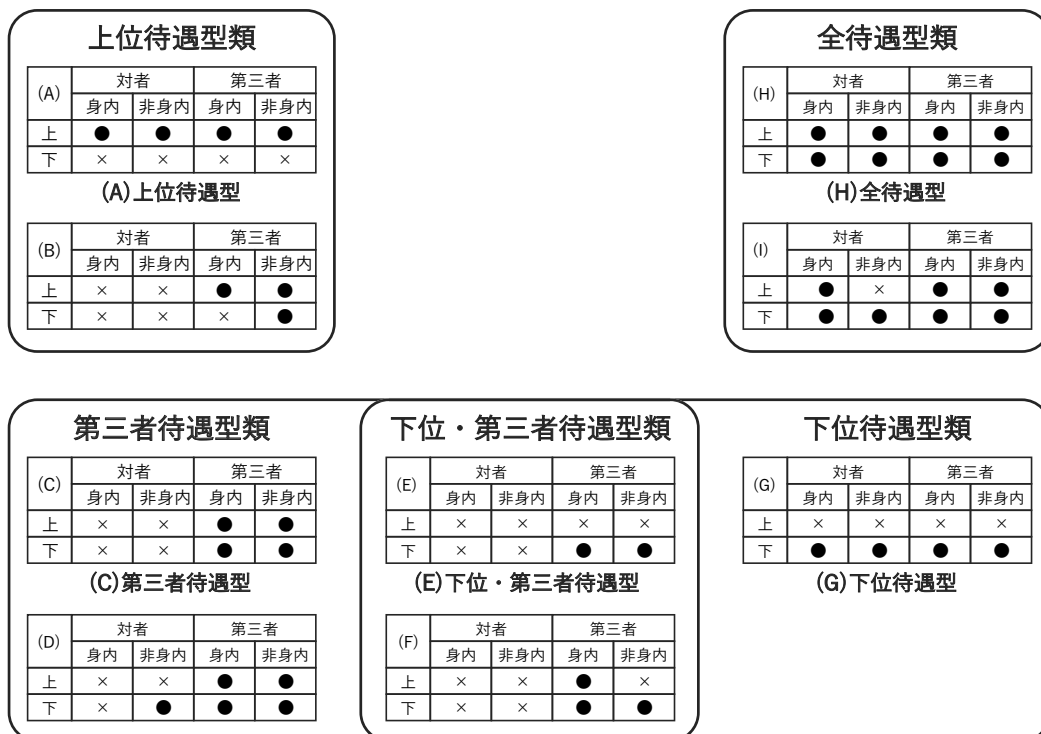


図 2 長浜市の若年層の(ヤ)ンスの待遇型

待遇型は対者待遇/第三者待遇、身内/非身内、目上/目下⁴の3つの観点から分類し、例えば対者待遇場面で父/母に対して(ヤ)ンスを「言う」あるいは「言わないがおかしい」場合は〈対者待遇・身内・目上〉に●を、「言わないしおかしい」場合は×をつけるというように表を埋めた。ただし、各待遇対象を(ヤ)ンスで待遇することの許容度を明らかにするため、「言わないがおかしい」も「言う」と同様に扱った。アンケート結果には図2の待遇型以外の運用方法も見られたが、分析で待遇型として扱うのはその運用方法で回答した人が3人以上のものとし、2人以下のものは「その他」として扱った。また待遇型の上位分類として待遇型類を設定し、図2で囲んだように似た待遇型を1つの待遇型類とした。それぞれの待遇型類について典型的な待遇型を最上段に配置しその名称を記載している。

また、図2で示した待遇型が何件ずつ見られるかについては、表2に示した。

表2 長浜市の若年層の(ヤ)ンスの各待遇型の回答者数

待遇型類		上位待遇型類		第三者待遇型類		下位・第三者待遇型類		下位待遇型類	全待遇型類			
待遇型	不使用	A	B	C	D	E	F	G	H	I	その他	総計
回答者数	20	1 (0)	3 (0)	31 (5)	4 (0)	25 (15)	17 (4)	3 (0)	21 (0)	15 (1)	33	173
		4		35		42		3	36			

※()内は「言う」のみの回答者数で内数

表2を見ると、2節で(ヤ)ンスは待遇価値が低下しており、第三者待遇場面で用いられると確認した通り、本調査でも下位・第三者待遇型類が最も多く見られる結果となった。調査項目[1]で(ヤ)ンスを「よく言う」と回答した人がわずかに14.5%(25人)であったことを踏まえると、使用者の少なさに反して典型的な運用方法が維持されていると言える。しかし一方で、典型的な運用方法とは異なる第三者待遇型類や全待遇型類も下位・第三者待遇型類と同程度に多く見られる状況もある。

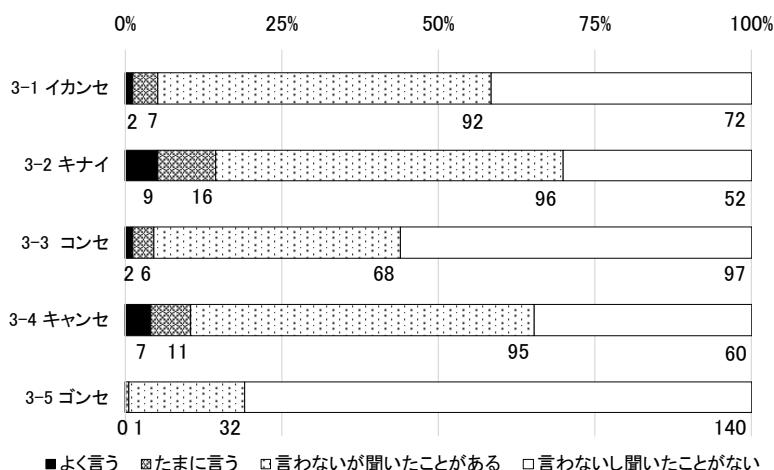


図3 素材待遇語の命令形の使用実態

⁴ 調査時は表1のように、非身内は目上/対等/目下の三段階に分けて人物設定を行ったが、対等と目下では調査結果にほぼ差がなかった。そのため、集計時は対等か目下のどちらかを「言う」もしくは「言わないがおかしい」と回答していれば、目下で「言う」もしくは「言わないがおかしい」と回答したものとして扱った。

最後に、調査項目[3]の結果を確認する。図 3 は調査項目[3]の結果を図にしたものである。「3-2 キナイ」を除く 4 つが(ヤ)ンスの命令形にあたるが、いずれも「よく言う」「たまに言う」の回答者は少なく、(ヤ)ンスの命令形の使用者はほぼいないと考えられる。

5. (ヤ)ンスの運用方法の変遷

本節では、4 節で明らかにした現在の若年層の(ヤ)ンスの使用状況を踏まえ、(ヤ)ンスの運用方法の変遷をより詳細に明らかにする。そこで、第三者待遇偏用の傾向と命令形の有無に注目して長浜市の方言に関する資料の分析を行う。

まずは第三者待遇偏用の傾向について見ていく。宮治(1987)の老年層(生年：1916 年以前)や酒井(2015)の話者(生年：1924～1954 年)において(ヤ)ンスは、第三者待遇偏用の傾向はあるものの対者待遇場面でも使用できた。また、宮治(1987)の老年層では典型的な待遇対象は親しい目上であったが、酒井(2015)では特に第三者待遇場面で下向き待遇が中心となることから、この時点で既に待遇価値の低下が確認できる。次に宮治(1987)の高校生(生年：1967～1970 年)では(ヤ)ンスは対者待遇場面では一切用いられないため、この世代で第三者待遇場面専用形式であることが文法的に確立したと考えられる。しかし現在の若年層(生年：2000 年～2007 年)が対象の本研究での調査では、4 節で見た通り対者待遇場面でも使用できるという全待遇型類の回答が一定数見られた。この原因について 6 節で考察する。

次に、命令形の有無について確認する。平澤(1986)は 50 代～80 代(生年：1894～1929 年)計 13 名を対象に長浜市(旧市内⁵)、高月町(旧郡部)、米原町(現米原市)で行われた臨地調査を元に湖北方言の文法をまとめたものである。平澤(1986)は高月町・米原町に「やさしい命令にキナイ・ゴンセ(来なさい)のようないい方がある」(平澤 1986:398)と述べている。これに関連する記述に、1931 年生まれの長浜市方言話者の内省を記した成田(1950)がある。これによると、(ヤ)ンスの命令形は神照村(旧市内)の 30 代(生年：1910 年代)前後以下の者からは大郷村(旧郡部)の「キタナイ言葉」(成田 1950：29)と思われて避けられている。また、酒井(2015)にも命令形の記述が見られ、命令形は長浜市方言について語るという限定的な場面や引用発話でしか用いられないと述べられている。つまり(ヤ)ンスの命令形は、特に旧市内に住む 20 世紀前半生まれの話者の間において衰退しつつあったと思われる。

また、上の資料の前後の世代への調査に藤谷(1975)やその続々編の藤谷・高橋(1985)がある。これは著者が採集した方言をその方言の話者が点検する形で作られた方言語彙集である。藤谷(1975)ではゴンセ、サンセ、シヤンセ、ヤンセが、藤谷・高橋(1985)ではサンセ、シヤンセ、シャンセが立項されている。使用地域は形式によって様々であるが、旧郡部だけでなく旧市内でも使われるとされる。(ヤ)ンスの命令形が旧市内では使用されないとい

⁵ 長浜市は 2006 年に浅井町、びわ町が、2010 年に虎姫町、湖北町、高月町、木之本町、余呉町、西浅井町が合併して現在に至る。本稿での「長浜市」は現在の行政区画上の長浜市を指しているため、本稿では合併前から長浜市であった地域を「旧市内」、合併前は長浜市以外の町があった地域を「旧郡部」と呼称する。

う平澤(1986)や成田(1950)の記述とは反するが、使用頻度などの記述がないため、使用頻度は低いものの旧市内でも広く認知されている方言として記録された可能性も考えられる。

最後に、第三者待遇場面専用形式であることが文法的に確立した宮治(1987)の高校生以降の調査に本研究の調査がある。本調査では(ヤ)ンスの命令形を「よく言う」人は数名しかおらず、現在では旧郡部を含む長浜市全域で(ヤ)ンスの命令形は衰退したと考えられる。

以上の資料を話者のおおよその生年順に並べてまとめたものが表 3 である。

表 3 (ヤ)ンスの変遷

	藤谷 (1975)	平澤 (1986)	宮治 (1987) 老年層	藤谷・ 高橋 (1985)	酒井 (2015)	成田 (1950)	宮治 (1987) 高校生	本研究
話者の 生年	1887～ 1924 年	1894～ 1929 年	1916 年 以前	1906～ 1935 年	1924～ 1954 年	1931 年	1967～ 1970 年	2000～ 2007 年
命令形	●※	▲	－	●※	▲	▲	－	×
第三者待 遇偏用	－	－	▲	－	▲	－	●	▲

●：存在する ▲：限定的に存在する ×：存在しない －：該当の記述なし

※：方言語彙集であり、詳細な用法についての記述が見られない。

表 3 を見ると、(ヤ)ンスの命令形の衰退と第三者待遇偏用化は 20 世紀の長浜市において並行して起こっていた現象であることがわかる。宮治(1987)と酒井(2015)より、これらの現象と同時に待遇価値の低下も起こっている。このことから、(ヤ)ンスは待遇価値の低下によって、より待遇対象への配慮が求められる対者待遇場面での使用が避けられ始め、その結果(ヤ)ンスの命令形の衰退と第三者待遇偏用化が起こったものと考えられる。また、命令形の衰退は旧市内から起こった現象であることから、第三者待遇偏用化も旧市内、つまり長浜市の中心部から起こった現象であると考えられる。

6. (ヤ)ンスの使用実態と 運用方法の関連性

本節では、一度第三者待遇偏用化した(ヤ)ンスに、現在の若年層において新たに全待遇型類という運用方法が見られるようになった原因を検討する。図 4 は、調査項目[1]と調査項目[2]の(ヤ)ンスの回答をクロス集計した図である。この図

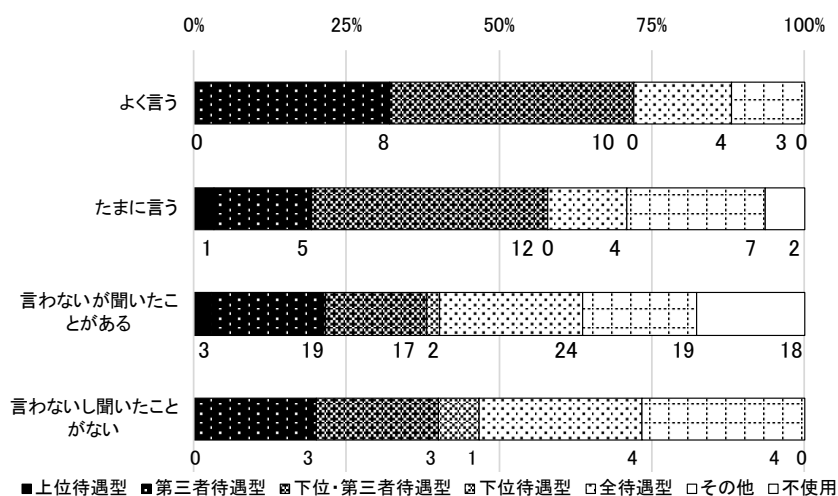


図 4 (ヤ)ンスの使用実態と運用方法の関係性

から、(ヤ)ンスの使用の程度によって運用方法に差があるかを考察する。

図 4 を見ると、「親愛の助動詞」(井之口・福山 1951 : 535)としての規範的な運用方法であると言える下位・第三者待遇型類の回答者数の割合が、(ヤ)ンスを言わない層になるにつれて下がっていることがわかる。反対に、(ヤ)ンスを言わない層になるにつれて増加しているのが、全待遇型類の割合である。ここから、全待遇型類は、(ヤ)ンスの典型的な運用方法が(ヤ)ンスを使用しない層にまでは浸透しておらず、(ヤ)ンスの使用者の減少に伴ってその運用方法が失われたことで回答された待遇型類だと考察できる。また坪井(2022)では、全待遇型類は(ヤ)アルで多く回答された待遇型類であった。(ヤ)ンスの運用方法の揺れが、(ヤ)アルによく見られる待遇型類が回答されるという形で現れたことは、(ヤ)ンスを使用しない層が、(ヤ)アルの運用方法から類推して(ヤ)ンスの運用方法の回答をしたことを表しているのではないか。

7. おわりに

本発表では、アンケート調査と方言資料の記述の整理から、(ヤ)ンスの運用方法の変遷について考察を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- (a) (ヤ)ンスはかつて命令形を持ち、対者待遇場面でも使用することができた。しかし、(ヤ)ンスの待遇価値が下がって対者待遇場面での使用が避けられるようになり、現在では第三者待遇場面専用形式として用いられるようになった。
- (b) 現在の若年層の間では、全待遇型類という第三者待遇偏用とは反する運用方法が多く見られるようになった。しかしこれは、(ヤ)ンスの運用方法の新たな変化と捉えるよりも、(ヤ)ンスの使用者の減少に伴って(ヤ)ンスの従来の運用方法が維持されなくなったために起きた現象だと捉える方が妥当である。

参考文献

井之口有一・福山隆士(1952)「滋賀県方言の調査(一)」『滋賀県立短大雑誌 B』1-2, 滋賀県立短期大学学芸部／榎垣実(1962)「近畿方言総説」『近畿方言の総合的研究』三省堂／寛大城(1962)「滋賀県方言」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂／坪井菜央(2022)「滋賀県長浜市若年層の素材待遇形式の使用実態と運用方法の変遷について—(ヤ)アルの待遇型に注目して—」『日本方言研究会第 115 回研究発表会発表原稿集』2022 年 11 月 5 日, オンライン／藤原与一(1978)『昭和日本語方言の総合的研究第一巻 方言敬語法の研究』春陽堂

参考資料

酒井雅史(2015)「滋賀県長浜市方言の素材待遇形式に関する記述的研究」大阪大学博士論文／成田ふみゑ(1950)「近江長浜付近の語法」榎垣実編『近畿方言』4, 近畿方言学会／平澤洋一(1986)「滋賀県湖北方言の文法」『城西大学女子短期大学部紀要』3-1, 城西大学／藤谷一海(1975)『滋賀県方言調査』教育出版センター／藤谷一海・高橋重雄編著(1986)『滋賀県方言調査 続々編』教育出版センター／宮治弘明(1987)「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151, 国語学会

島根県出雲方言における「動詞非過去形+ダ」とノダ文¹

野間 純平²

1. はじめに

島根県東部の出雲地区で話されている言語（以下「出雲方言」とする）では、以下の例のような、用言に「ダ」がつく表現がある。

- (1) ナカナカ ナオラン ダ。(なかなかおらないよ。)

(神部 1982:236 より、出雲南部の例)

- (2) オレモ モー ロクジューニ ナルダ (俺ももう 60 歳になるよ)

(千葉 2017:30 より、松江市の例)

この「ダ」は、以下のように名詞述語につく形式で、断定辞やコピュラなどと呼ばれるものと同じ形である。

- (3) フター フトダ。 オラー オラダ。(人は人だ。おれはおれだ。)

(神部 1982:229 より、出雲南部の例)

つまり、出雲方言では、用言に準体助詞がつかずにコピュラが後接することが可能な「ゼロ準体助詞型方言」(彦坂 2006)であると言える。この形は、準体助詞の有無を除けば、いわゆる「ノダ文」に対応する。しかし、たとえば上記の「ナオランダ」が「なおらないのだ」に意味的にそのまま対応するかどうかは十分に検討されていない³。

そこで、本発表では、出雲方言における「動詞非過去形+ダ」が表す意味について、平叙文と疑問文に分けて記述し、いわゆる「ノダ文」との関係について考察する。本発表の構成は以下のとおりである。まず 2 節で、出雲方言における「ダ」の先行研究を取り上げ、本発表が問題とすることを明らかにする。3 節では、本発表で主に用いるデータについてその概要を述べ、4 節と 5 節でそれぞれ平叙文と疑問文における「動詞非過去形+ダ」について記述する。6 節では、そこで記述した「動詞非過去形+ダ」の意味とノダ文との関係について考察する。最後の 7 節はまとめである。

2. 先行研究と問題のありか

2.1. 出雲方言の「ダ」

千葉 (2017) は、島根県松江市 (出雲地区に含まれる) 方言における「ダ」および「デス」

¹ 本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」および JSPS 科研費 21K13015、20H00015、22K00598 の助成を受けている。

² のま じゅんぺい (島根大学) jp-nom@soc.shimane-u.ac.jp

³ 広戸 (1949) には「ノダ」に対応する「ダ」に関する記述があるが、意味に関して十分な記述がなされているとは言えない。

を、出現環境から「ダⅠ・デスⅠ」と「ダⅡ・デスⅡ」の2種類に分けた（以下では便宜上「ダ」のみに限って話を進める）。「ダⅠ」は述語化の機能を持つ「ダ」であり、「ダⅡ」は述語化に関係しない。以下の表1に「ダ」の出現環境一覧を示す。

表1 島根県松江市方言における「ダ」の出現環境（千葉 2017:26）

	ダのみ	ダとタの共起	分類
名詞など	春ダ	春ダッタ	ダⅠ
形容動詞語幹	鮮やかダ	鮮やかダッタ	
そうだ（様態）	死にそうダ	死にそうダッタ	
動詞（基本形）	行くダ	行ッタダ	ダⅡ
形容詞（基本形）	寒いダ	寒かッタダ	
否定形	書かんダ	書かんかッタダ	
たい（願望形）	書きたいダ	書きたかッタダ	

「ダⅠ」は体言につき、述語化の機能を持つ。一方、「ダⅡ」は述語化には関係しない形式であり、述語である用言の後ろにつく。両者の違いは、「過去」の「タ」と共起する際の相互承接に表れる。

本発表が記述の対象とするのは、上記の「ダⅡ」に当たる。「ダⅡ」が述語化に関わっていないのであれば、その機能は何なのかというのが本発表の問いである。「ダⅡ」の意味機能について千葉（2017:31）は、「自身（を含む集団）の状況を相手（独り言の場合は自分になる）に示し、その情報を自分と相手との間で確認するためのもの（そして、ガとの比較によれば、その情報には話者本人の様子・意思・希望などを勘案した上での確実性が含まれる）」と結論づけている。しかし、千葉自身も「ただし、ダⅡは、担う意味機能はかなり幅広いものとなっているようである」（p.31）と指摘するように、上記の記述は「ダⅡ」が持つ機能のうちの一部にすぎないと考えられる。

そこで、本発表では、千葉のいう「ダⅡ」のうち、千葉が取り上げていない環境の用例を取り上げ、その意味を記述することを目的とする。具体的には、対象とする語形を「動詞非過去形＋ダ」に限り、平叙文と疑問文における用例を取り上げる。

2.2. 「ゼロ準体助詞型方言」とノダ文

出雲方言のように、準体助詞を介さずに用言にコピュラがつく方言は、彦坂（2006）や大西（2013）などで「ゼロ準体助詞型方言」と呼ばれ、その地理的分布や成立過程との関係が考察されてきた。なかでも杉浦（2005）は、ゼロ準体助詞型方言における「用言＋コピュラ」が先行研究においてしばしばノダ文に相当すると記述されることを踏まえて、「ノダ文に相当する」ことを客観的に検証する必要性を主張している。そして、談話資料を用いて

検証を試みているが、データの少なさなどの問題もあり、十分な検証はできていない。

これを踏まえて、本発表では、出雲方言の「動詞非過去形+ダ」が持つ意味について記述したうえで、それらが標準語のノダ文と対応するか否かを検討する。すべての「用言+ダ」に共通の機能を見出そうとするのではなく、意味に共通性のある 2 種類の用法を取り上げて記述することを試みる。対象とする述語を動詞非過去形に限定するのは、その 2 つの用法に用いられる述語のほとんどが動詞非過去形に限られるためである。

3. データ概要

本発表で用いるデータは、出雲市平田地区（以下「平田」とする）において行った面接調査において得られたものである。島根県の方言は一般的に、出雲方言・石見方言・隠岐方言の 3 つに大きく区画されるが、平田は出雲方言が話される地域に含まれる。話者は 1938 年生まれの男性で、島根県西部の石見地区における数年の外住歴を除いて、現在まで平田で生活している。

本発表で提示する例文は、特に断りのない限り上記の調査で得たものである。例文は表層の音素形で表し、グロスと標準語訳を加えた 3 段方式で示す（問題となる=da には DA というグロスをあてる）。平田方言の音素について、詳細は野間・友定（2022）を参照されたい。

4. 平叙文における「動詞非過去形+ダ」

出雲方言では、「動詞非過去形+ダ」が、平叙文においてしばしば=wa や=ga などの終助詞を伴って、聞き手への行為指示表現として用いられる⁴。

- (4) *sugu modoR=da.*
すぐ 戻る.NPST=DA

「(夜遅く出歩いている子に) すぐに帰れ」

- (5) *hogami se-Nkoni koQci miR=da=ga.*
よそ見 する-NEG.SEQ こっち 見る.NPST=DA=SFP

「よそ見しないでこっちを見ろ」

(4) と (5) はどちらも拘束力が強く、聞き手に利益がない〈命令〉の発話行為（高木 2009）である。なお、平田方言では、行為指示表現として、他にも命令形（*modor-e* ‘戻る-IMP’）や尊敬語の命令形（*mi-nahai* ‘見る-HON.IMP’）など、多種の表現が用いられる。

また、以下の例のように、聞き手に対する拘束力が弱い〈勧め〉や〈許容〉の場面でも「動詞非過去形+ダ」が用いられる。

⁴ 出雲方言では、語中のラ行音節、特に /ri, ru/ が脱落し、直前の母音が長音化する「ラ行音節隠在化」（室山 1964）と呼ばれる現象が起こることがある。たとえば (4) の述語は *modoR* だが、同じ話者が *modoru* という形を使用することもあり、両者の間に特に違いはない。

- (6) *o-cja ire-ta=keN noN=da=wa.*
 POL-茶 入れる-PST=CSL 飲む-NPST=DA=SFP
 「お茶を入れたから、飲んでね」

- (7) *huro hair-ita-kerja haR=da=wa.*
 風呂 入る-DES-CND 入る=DA=SFP
 「風呂に入りたければ入れ」

さらに、話し手に利益のある〈依頼〉の場面でも「動詞非過去形+ダ」が用いられる。

- (8) *koke namae kai-te gos-u=da=wa.*
 ここ.ALL 名前 書く-SEQ くれる-NPST=DA=SFP
 「ここに名前を書いてくれ」

- (9) *zi=ga koma-te mie-N=keN kawaRni mi-te gos-u=da=wa.*
 字=NOM 小さい-SEQ 見える-NEG=CSL 代わりに 見る-SEQ くれる-NPST=DA=SFP
 「字が小さくて見えないから、代わりに見てくれ」

gos-は「くれる」に当たる動詞であり、-te gos-が「～てくれる」に当たる。この gos-を行為指示の形（命令形 gos-e、尊敬語の命令形 gos-inahai、否定疑問形 gos-aN=ka など）にすることで、聞き手への「依頼」として機能する。このとき、上の例のように=da を用いた形も行為指示表現として用いられる。

以上のような行為指示の「動詞非過去形+ダ」は、形のうえでは「やめろ。おい、やめるんだ」のような標準語の「命令のノダ」に近いが、使用できる発話機能の範囲が大きく異なる。日本語記述文法研究会編（2003）や幸松（2022）が指摘するように、「命令のノダ」とは、「聞き手が実行すべきだと話し手が考える行為を示して、その実行を促すところから、行為要求的な機能が生まれてくるもの」（日本語記述文法研究会編 2003:70）とされる。したがって、「*ここに名前を書いてくれるんだ」のような、〈依頼〉にはなじまない。一方、出雲方言の「動詞非過去形+ダ」は、(8) や (9) にもあるように、〈依頼〉の発話行為でも使用可能である。以上のことから、出雲方言では、平叙文において動詞非過去形につく「ダ」に、行為指示の意味が焼き付けられているのではないかと考えられる。

5. 疑問文における「動詞非過去形+ダ」

出雲方言の疑問文における「動詞非過去形+ダ」については、田村（2022）の記述が詳しい。田村（2022）は、疑問文における「ダ」の特徴を「動作主がコントロールできる動作について、動作主の関与しないところで、既にその動作を行うことが定められているものとして問いかける」（p.42）と説明している⁵。たとえば、次のような例が典型的である。

⁵ 田村（2022）の記述は、出雲市（旧出雲市域）出身の30歳代男性である田村自身の内省にもとづいている。本発表で述べる内容も、おおむねこれに沿ったものになるが、提示する例文は、発表者が平田で行った調査において得たものである。

(10) *ora=ga kuR=da=kai.*

1.SG=NOM 食べる.NPST=DA=Q

「(残りを食べろと言われて) 俺が食うのか」

(10) は、食卓で少しだけおかずが余った場面で、残りを食べるように言われた話し手が発した文である。ここでは、「残りのおかずを食べる」のは話し手だが、話し手がその動作を行うことは、話し手以外の人によって決定されたことである。(10) の述語が「動詞非過去形+ダ」の形になっているのは、このような「動作主の関与しないところで、既にその動作を行うことが定められている」からである。

本発表では、以上のような「動詞非過去形+ダ」が成り立つような問いかけを「当為の問いかけ」と呼ぶことにする。「当為」の意味するところは、次のような例がわかりやすい。

(11) *kono kami koko=e das-u=da=kai.*

この 紙 ここ=ALL 出す-NPST=DA=Q

「(役場の職員に) この書類はここに出すの？」

(12) *kono sjorui=wa doko=e das-u=da=kane.*

この 書類=TOP どこ=ALL 出す-NPST=DA=Q

「(役場の職員に) この書類はどこに出すの？」

これらはどちらも、役場に書類を出しに来て、その提出先を職員に尋ねている場面である。

(11) は真偽疑問文、(12) は補充疑問文だが、どちらも述語は「動詞非過去形+ダ」の形をとっている。当該の書類を役場に提出することがルールとして決まっており、「出すことになっているのか」「出さなければならないのか」といった意味の発話である。「ダ」を用いるにはこのような状況が必要であり、次のような例は似た場面だが、「動詞非過去形+ダ」は不自然になる。

(13) *aNta sore das-u=kane.*

2.SG それ 出す-NPST=Q

「(書類を出そうとしている相手に) あなた、それ出すの？」

(13) は、任意で提出する書類を持っている相手に会った際の発話である。聞き手が「出さなければならない」かどうかを尋ねるのではなく、聞き手が「出す判断をした」かどうかを尋ねるため、「動詞非過去形+ダ」だと不自然になると考えられる。

ただし、「当為」というのは便宜上のラベルであり、「動詞非過去形+ダ」が「規則」のようなものだけを問題にするわけではない。次の例は、処方された薬の飲み方について、医者尋ねている場面である。薬の飲み方は、専門家である医者が決めるため、患者である話し手の意思に関係なく「食後に飲むことになっている」ため「ダ」が用いられる。

(14) *kono kusuR=wa sjokugo=ni noN=da=kane.*

この 薬=TOP 食後=LOC 飲む.NPST=DA=Q

「この薬は食後に飲むの？」

また、規則や専門性などが関係なくとも、動作主以外のところで意思決定が行われる次のような場面でも「動詞非過去形+ダ」で表現される。

- (15) *koR=wa doko=ni ok-u=da=kane.*
これ=TOP どこ=LOC 置く -NPST=DA=Q
「これはどこに置くの？」

(15) は、話し手が聞き手の引っ越しを手伝っている場面である。引っ越しの荷物を置く場所は、家主である聞き手が決めることであり、「置く」の動作主である話し手の関与しないところで決定されている。そのため、このような場合にも「動詞非過去形+ダ」が用いられる。

では、「動詞非過去形+ダ」を用いた「当為の問いかけ」は、標準語のノダ文とどのような関係にあると言えるだろうか。上に示した出雲方言の例文は、いずれも標準語だと「～のか？」で置き換えることができる。しかし、動作主自身が決定した行為について尋ねる(13)では、ノダには対応するが、「ダ」は使えない。つまり、出雲方言の「動詞非過去形+ダ」による「当為の問いかけ」は、ノダ疑問文が表す意味の一部には対応するが、より狭いと言える。林(2020)によると、ノダ疑問文は、「事実との一致を強く意識するもの」とされているが、出雲方言の「動詞非過去形+ダ」は、この「事実」が「動作主が関与しないところで決まっている」ときにのみ使用されると言える。

6. 出雲方言の「動詞非過去形+ダ」とノダ文

以上、出雲方言において「動詞非過去形+ダ」が用いられる表現のうち、「行為指示」と「当為の問いかけ」について記述してきた。どちらも、一部ノダ文と重なる意味はあるが、完全に対応するわけではないことが明らかになった。そして、どちらの「ダ」にも共通するのは、「当該の行為を実行するべきであると考えられている」という点である。平叙文の場合は、「当為」の意味がもはやなく、純粋な「行為指示」として成り立っているが、疑問文の場合は「当為」が色濃く表されている。

では、このような「動詞非過去形+ダ」とノダ文とのずれは、何を意味するだろうか。考えられるのは、出雲方言の「動詞非過去形+ダ」は、ノダ文と一部重なっているが、根本的には「ノダ文」とは別の表現ではないかということである。つまり、名詞句をまとめあげるという機能を持った準体助詞が文末につくことで様々な意味を表すようになったのではなく、「ダ」は最初から終助詞のようなものだったのではないかということである。

その根拠と考えられるのは、出雲方言において連体形準体法が盛んではないことである。杉浦(2005)なども指摘するように、「ノダ」のノに当たる形式を欠く方言は、古典語の名残としてしばしば連体形準体法を持つと言われる。つまり、準体助詞がなくても、用言の連体形が名詞相当として機能するのである。たとえば、山梨県塩山市方言には、次のような用例が見られる。述語の「エライ」に「ダ」が直接つく例とともに、動詞「ヒク」の終止

連体形が名詞として機能している例である⁶。

(16) ソレコサ ソレカ° コメオ ヒクカ° エライダヨ アサッカラ。

(それこそそれが米を挽く[の]が大変なのだよ朝から。)

(山梨県塩山市、「日本語諸方言コーパス (COJADS)」より)

一方、出雲方言では、一部の場合を除いては⁷、用言が名詞相当に働くためには、準体助詞=no や形式名詞 jacu が必要になる。

(17) *soko=ni aR toQ-te goi-ta.
そこ=LOC ある.NPST 取る-SEQ くれる-PST
「そこにあるのを取ってくれ」

(18) soko=ni aR jacu toQ-te goi-ta.
そこ=LOC ある.NPST やつ 取る-SEQ くれる-PST
「そこにあるのを取ってくれ」

(19) *hutoRde ik-u=wa ja=da.
一人で 行く-NPST=TOP 嫌=COP.NPST
「一人で行くのは嫌だ」

(20) hutoRde ik-u=no=wa ja=da.
一人で 行く-NPST=NMLZ=TOP 嫌=COP.NPST
「一人で行くのは嫌だ」

このように、出雲方言では、連体形準体法があまり盛んではない⁸。このことから、出雲方言の（少なくとも本発表で取り上げた）「動詞非過去形+ダ」は、「名詞化された述語句を名詞文として提示する」というルートで成立したのではない可能性が考えられる。

7. まとめ

以上、本発表では、出雲方言の「動詞非過去形+ダ」のうち、平叙文において行為指示表現として用いられる例と、疑問文において「当為の問いかけ」として用いられる例を記述した。そして、それらの意味・機能が標準語のノダ文と一部重なりを見せつつも、対応した表現とは言いがたいことを述べた。その背景として、出雲方言の「動詞非過去形+ダ」がそもそも形のうえでも「ノダ相当」ではない可能性に言及した。

ただし、本発表で示したのは、あくまで「用言+ダ」の一部である。たとえば、冒頭で示

⁶ 他にも、中部地方の方言では「だろう」と「のだろう」に当たる形式がそれぞれ別であることが多いが、これもまた連体形準体法によるものであるとされる（大西 2013）。

⁷ 「俺が買うのはこの本だ」のような（疑似）分裂文や、「車があれば買い物に行くのに便利だ」といった例では、「の」に当たる箇所がゼロでも許容されるようである。

⁸ 標準語との接触によって=no が使われるようになったというわけではなさそうである。島根県全域での方言調査報告である島根県女子師範学校編（1932）には、「白いのは」という調査項目があるが、「ノ」か「ヤツ」を用いた回答のみとなっている。

した例などは、本発表の対象から除外したものであり、まだ説明できない例である。「用言＋ダ」とノダ文との関係を明らかにするには、これらの「用言＋ダ」も検討しなければならないが、すべての「用言＋ダ」が同じものであるという前提に立つ必要はないと考えている。また、同じ「ゼロ準体助詞型方言」にも「ノダ」との関係に関して多様性があることが示唆された。この多様性を明らかにすることもまた大きな課題である。

略号一覧

-: 接辞境界 / =: 接語境界 / 1: 一人称 / 2: 二人称 / ALL: 向格 / CND: 条件 / COP: コピュラ / CSL: 理由 / DES: 願望 / HON: 尊敬 / IMP: 命令 / LOC: 所格 / NEG: 否定 / NMLZ: 名詞化辞 / NOM: 主格 / NPST: 非過去 / POL: 丁寧 / PST: 過去 / Q: 疑問 / SEQ: 中止 / SFP: 終助詞 / SG: 単数 / TOP: 提題

参考文献

- 大西拓一郎（2013）「用言準体法の分布と形式」熊谷康雄編『大規模方言データの多角的分析 成果報告書一言語地図と方言談話資料―』pp.59-68, 国立国語研究所。
- 神部宏泰（1982）「島根県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 8 中国・四国地方の方言』pp.211-238, 国書刊行会。
- 島根県女子師範学校編（1932）『島根縣に於ける方言の分布』（国書刊行会から復刊 1975）。
- 杉浦滋子（2005）「「ノダ」をもたない方言の諸相」『言語と文明：麗澤大学大学院言語教育研究科論集』3, pp.3-20。
- 高木千恵（2009）「命令表現」国立国語研究所全国方言調査委員会編『方言文法調査ガイドブック 3』pp.105-129。
- 田村侑久（2022）『出雲方言の疑問文におけるダの意味・機能』島根大学大学院修士論文（未公刊）。
- 千葉軒士（2017）「島根県松江市方言のダについて」『Nagoya Linguistics 名古屋言語研究』11, pp.25-33, 名古屋言語研究会。
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版。
- 野間純平・友定賢治（2022）「島根県出雲市平田」セリック, ケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一編『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』pp.215-266, 国立国語研究所。
- 林淳子（2020）『現代日本語疑問文の研究』くろしお出版。
- 彦坂佳宣（2006）「「行くダ」などの言い方をする方言群とその性格」『名古屋・方言研究会会報』23, pp.1-11。
- 広戸惇（1949）『山陰方言の語法』島根新聞社。
- 室山敏明（1964）「鳥取県伯耆西部方言におけるラ行音節の隠在現象」『国文学攷』33, pp.24-34, 広島大学国語国文学会。
- 幸松英恵（2022）「「命令のノダ」とは何か」『東京外国語大学国際日本学研究』2, pp.164-182。

現代津軽方言における言語内的・外的要因による清濁対立の分析

CHICO Sayumi¹

1 はじめに

本発表では青森県津軽方言における母音間清音/*t, k*/と母音間濁音/*d, g*/との間に見られる音韻論的区別の近年の変化を分析する。津軽方言やその他の東北方言において、一部の清音子音が母音と母音の間では有声化し、また一部あるいはすべての濁音子音が同じ環境で前鼻音化する傾向があることは周知の通りである。これらの方言では清音と濁音を区別する弁別的素性は鼻音性 (nasality) であると言える (大橋 2002、黒木 2017)。青森県の方言から例を挙げると次の通りである (此島 1982)。

- (1) 旗 /hata/ → [hada]; 落とす /otos-u/ → [odosu]
- (2) 柿 /kaki/ → [kagi]; 開ける /ake-ru/ → [ageru]
- (3) 窓 /mado/ → [maⁿdo]
- (4) 鍵 /kagi/ → [kãŋi]; 上げる /age-ru/ → [aŋeru]

また、『日本言語地図』(1966–1974) から例を挙げると、第 154 図は、「糸・井戸」というミニマル・ペアの発音を日本全国でどのように発音されているか示したものであるが、「糸」の発音[ido]と「井戸」の発音[i[̃]do]という鼻音性による清濁対立が東北地方の北部に集中していることがわかる。

このような鼻音性による清濁対立 (nasal seidaku distinction) は、歴史的に見ると、清音 /*p* (→*f*→*h*) , *t, k, s*/と濁音/*b, d, g, z*/のすべての清濁ペアに対して存在したが、多くの方言では段階的に鼻音性によらない清濁対立 (non-nasal seidaku distinction) へと変化したと見られる (Wenck 1954–1959, Frellesvig 2010)。現代津軽方言でも清濁対立の弁別的素性は鼻音性から有声性へと変化しつつあると言われている (黒木 2017, 大橋 2002) が、その変化がどれほど進んでおり、また他の方言と同じように段階的に起きているかどうかを明らかにすることが本発表の目的である。

2 先行研究

以上のように、東北方言では母音間子音の有声化があることが言われているが、音韻的要因により、起こらない場合もある。具体的には、清音子音が無声化母音と特殊モーラ /*Q*/や/*N*/に後接する場合は有声化しない (此島 1982、大橋 2002)。大橋 (2002) は、東北方言の母音間有声化に対する内的要因について考察した結果、語彙的性格や形態素境界によるバリエーションもあることを明らかにした。例えば、外来語や稀用語や不熟複合語は基本的に有声化しない。これらの語の共通点として、「日常性」を欠けていることを挙げられる。その一方で、熟語と文節において有声化率が高い理由として、独立性が低いこと

¹ チコ サユミ (東北大学大学院生) sayumi.chico@dc.tohoku.ac.jp

が挙げられる。さらに、/k/の有声化に対する外的要因を分析した結果、若年層において/k/の有声化が減少の傾向にあることがわかった。そして、会話では有聲化率が上がることも明らかになった（大橋 2002）。

濁音の鼻音化については、音韻的な制約は見られなかったが、複合語境界では鼻音化率が若干減少の傾向にあった。/g/の鼻音化の場合、共通語でも、環境によっては制約される。例えば、擬音語・擬態語の形態素境界や近代以降日本語に入った外来語では鼻音化は基本的に起こらない（日比谷 1999、Vance 2008）。東北方言の話に戻ると、/g/以外の鼻濁音は高年層から中年層の間では急激に減少し、若年層に至ると、ほとんど見られなかった。軟口蓋鼻音 [ŋ] は東北地方に広く見られたが、若年層の話者は高年層の話者よりも鼻音の割合が低い傾向があった。東北の北部地方では[ŋ]は今後も顕著に残ると予測されるが、[g]の発音は東北の南部地方から北部地方まで浸透していくことも予想されている（大橋 2002 p. 278）。

日比谷（1999）は東京の山の手地域および下町地域における/g/鼻濁音の減少に影響を与える言語外的要因を分析したが、日比谷の調査方法は東北地方の方言に対しても適用できると考えられる。日比谷はウィリアム・ラボフ（William Labov）のようなアメリカの言語学者の影響を受けて、変異主義社会言語学（variationist sociolinguistics）の観点から/g/鼻濁音の減少の要因を調査した。変異主義社会言語学によると、言語的変動には構造があり、それを制約する上で社会的要因が大きく影響を与えている。日比谷は山の手地域で話されている格調の高い言語変種との接触が多い話者は、[ŋ]より[g]をよく発音する傾向があることを明らかにした。その結果、言語内的要因と言語外的要因はどちらもバリエーションに強く影響していることがわかった。日比谷（1999）が述べた通り「この通時的変化は共時的変化として現れ、それは社会的要因と言語的要因の両方によって制約される」（日比谷 1999 p. 118 筆者訳）。

3 研究の方法

3.1 調査の概要

2022年9月に青森県東津軽郡外ヶ浜町で、社会言語学的インタビュー（sociolinguistic interview）および言語テスト（linguistic tasks）からなる方言調査を実施した。録音許可を同意書でもらった上で、インタビューを行った。インタビューではインフォーマント同士でのフリートークを約1時間録音した後に絵や単語を見せながらインフォーマントの一人一人にその単語を使ってオリジナルな文を作ってもらった（このテストを「文章作り」と呼ぶ）。他のテストもいくつか行ったが、本発表では分析しないので、説明を省く。集めた録音の中から10名のインフォーマントの発話を分析し、清音/t, k/の母音間有聲化と濁音/d, g/の母音間（前）鼻音化の有無を調査した。

変異主義社会言語学の方法論では2～3人のグループでインタビューを行うのが一般的である。社会言語学的インタビューの一つの長所は観察者効果（observer's effect）をでき

るだけ減らすことができる点である。なるべく長い時間インフォーマントと会話したり、複数回インタビューを行ったりすることで、インフォーマントとの距離感を縮めて、インフォーマントから自然な会話が出るようにするのが重要なポイントである。フリートークの時の発言は「casual speech」（カジュアルなスピーチ）と呼び、文章作りの時の発言は「conscious speech」（意識的なスピーチ）と呼ぶ。フリートークの時でも、理想的な自然会話を録音することが難しい。どうしてもインフォーマントが観察されていることや録音されていることを意識してしまい、これによって自然な発話が得られなくなることがある。したがって、場面やテストにより、使用域や意識を変えて比較する必要がある。

3.2 データ処理と統計分析

Praat という音声分析用のフリーソフトウェアを使い、録音を一次処理した。有声化・鼻音化の有無についての判断は、発表者の感覚だけではなく、スペクトログラムや波形に基づいて分析した。

形態素境界の種類	Examples /t/	Examples /k/
語中	旗 /hata/ みたい/-mitai/	柿 /kaki/ だけ/=dake/
複合語	花束 /hana+taba/	鳥籠/tori+kago/
助詞	俺と/ore=to/	家から/ie=kara/
接辞	あげた/age-ta/	強く/tuyo-ku/

表 1 /t, k/の形態素境界の種類

形態素境界の種類	Examples /d/	Examples /g/
語中	肌 /hada/ けど /-kedo/	鍵 /kagi/ ながら /-nagara/
二字漢語	階段 /kaidaN/	大学 /daigaku/
助詞	で /=de/	が /=ga/
連濁	友達/tomodati/	手紙/tegami/
複合語	国際電話 /kokusai+deNwa/	生ゴミ /nama+gomi/

表 2 /d, g/の形態素境界の種類

語彙層（lexical strata）と形態素境界の種類は Irwin & Zisk (2019) と Zisk (2023) によって分類した。語彙層は和語、漢語、外来語、擬音語・擬態語の 4 つに分けた。音素 /t, k/ の場合、形態素境界の種類は語中、助詞、接辞、複合語という 4 種類であった。音素 /d, g/ の場合、形態素境界の種類は語中、二字漢語、助詞、連濁、複合語という 5 種類であった。

表 1 と表 2 には、それぞれの形態素境界の例を上げる。これ以外の種類に当てはまる例は本発表では取り上げないことにする。

得られた結果に対して JASP という統計分析のフリー

ソフトウェアを使い、二項ロジスティック回帰分析を行うことで各音素の有声化および鼻音化の確率を図式化した。予測変数として、言語内的要因である形態素境界の種類と、言語外的要因である年齢、性別、使用域という 4 つの値を採用した。年齢は 20 才から 71

才までの 10 種類で、性別は男性と女性の 2 種類で、使用域は casual（自然）と conscious（意識的）の 2 種類である。

4 結果

4.1 一次結果

大橋(2002)が報告したとおり、無声母音と促音/Q/に後接する場合の/t, k/は有声化しない。外来語や擬音語などにも有声化した例が無かった。したがって、これらを統計分析から除外した。フリートークと文章作りの音声データの中では、前鼻音化した/d/は無かった。そのため、/d/の統計分析はできなかった。擬音語・擬態語においても有声化した例は全くな

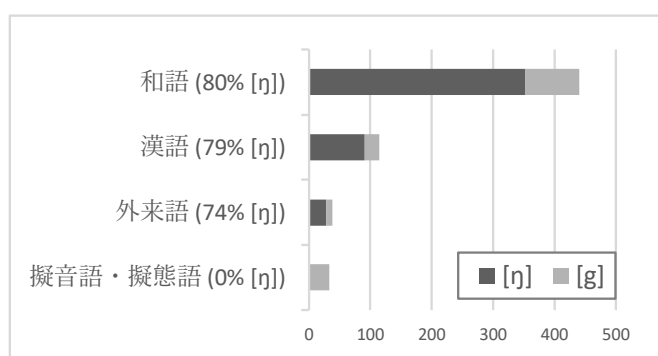


図 1 語彙層による/g/の鼻音化

く、外来語の有声化も極めて少なかった。/t/と/k/の統計分析から除いた。/g/の場合は、擬音語・擬態語の鼻音化が/t, k/の場合と同じように無かったが、外来語の鼻音化が高かったため、擬音語・擬声語だけ統計分析から除いた。形態素境界の種類と語彙層は互いに関連性が高いので、語彙層は統計分析に含めなかった。

4.2 統計分析の結果

4.2.1 /t/の有声化の確率

音素/t/の有声化については、上記の 4 つの独立変数を用いたロジスティック回帰モデル

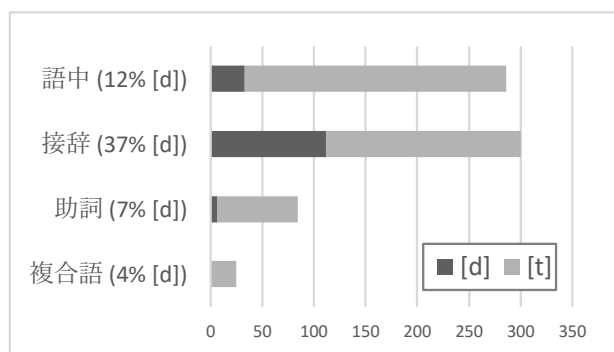


図 2 形態素境界による/t/の有声化

をヌルモデルと比較した結果、 $\chi^2(688) = 90.129, p < 0.001$ と統計的に有意であり、分散の 18.7% (Nagelkerke R^2) を説明した。形態素境界の種類は、/t/の有声化にとって有意な予測因子であった。「接辞」では、/t/の有声化の割合が最も高かった (37%)。これは、基準となる「語中」(12%) よりも有意に高い頻度であった。「助詞」(7%) と

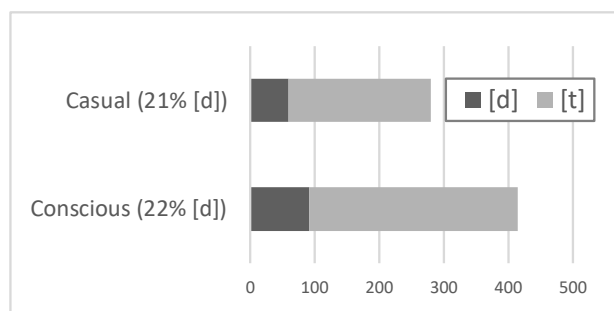


図 3 使用域による/t/の有声化

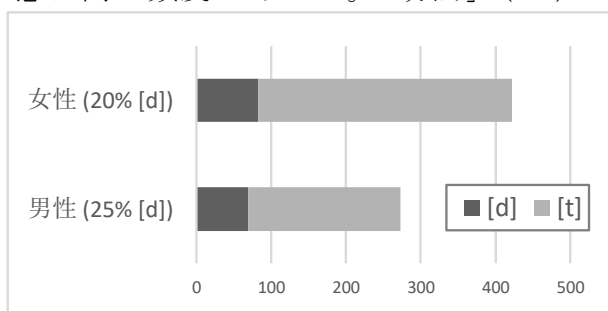


図 4 性別による/t/の有声化

「複合語」(4%)は、「語中」と比較して、/t/の有声化の割合が数値的に低かったが、これら3つのカテゴリーを比較すると、いずれも有聲化に有意な影響は見られなかった。年齢

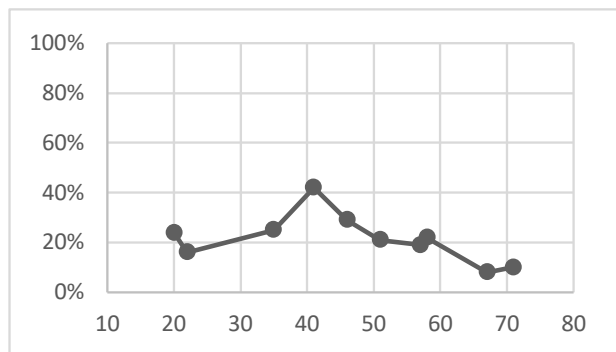


図 5 年齢による/t/の有声化

は/t/の有声化にとって有意な予測因子であった。意外なことに年齢が上がるにつれて/t/の有声化が減少する傾向にあった。また、使用域も、/t/の有声化にとって有意な予測因子であった。統計的には、/t/の有声化は、「conscious」(21%)よりも「casual」(22%)の方が有意に頻度が高かった ($p = 0.046$)。性別は/t/の有声化の確率に有意な影響を与えなかった ($p = 0.082$)。

4.2.2 /k/の有声化の確率

音素/k/の有声化についても、ロジスティック回帰モデルが統計的に有意であり、 $\chi^2(969)$

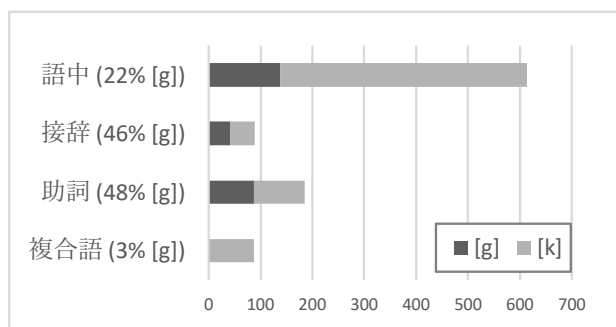


図 6 形態素境界の種類による/k/の有声化

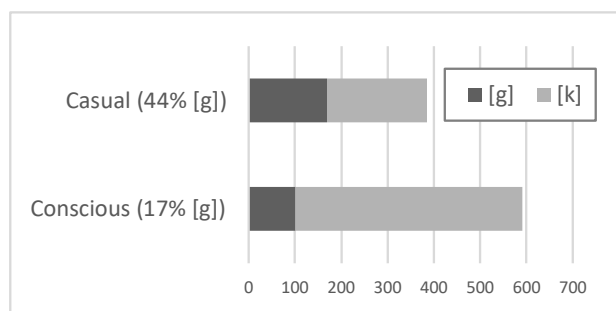


図 7 使用域による/k/の有声化

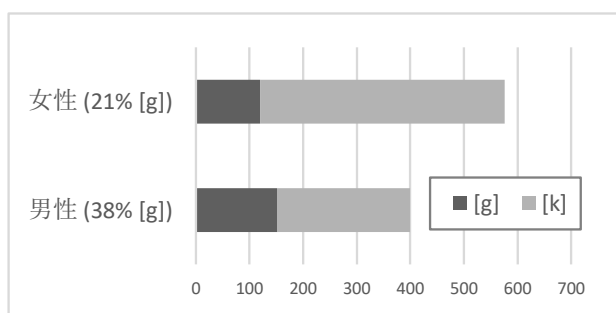


図 8 性別による/k/の有声化

= 174.830, $p < 0.001$ 、分散の 23.7% (Nagelkerke R^2) を説明した。形態素境界の種類は、/k/の有声化の有意な予測因子であった。「助詞」と「接辞」では、「語中」(22%)と比較して、/k/の有声化頻度が有意に高かった (48%)。助詞と接辞の間の/k/の有声化頻度の差は有意ではなかった。複合語 (3%) では、/k/の有声化頻度が語中と比較して有意に低かった。使用域も/k/の有声化を大きく影響した。「Conscious」よりも「casual」での/k/の有声化が多かった (44% > 17%)。性別では、男性話者の方が女性話者よりも/k/の有声化が多かった (38% > 21%)。年齢は/k/の有声化の有意

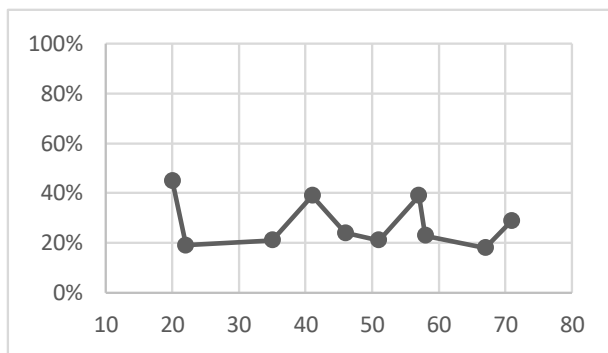


図 9 年齢による/k/の有声化

な予測因子ではなかった ($p = 0.24$)。

4.2.3 /g/の鼻音化の確率

音素/g/の鼻音化については、独立変数によるロジスティック回帰モデルが $\chi^2(585) = 102.401$, $p < 0.001$ と統計的に有意であり、分散の 24.9% (Nagelkerke R^2) を説明した。/g/が鼻音化する確率は、形態素境界種類に大きく影響された。特に、/g/ が鼻音化される頻度は、2つのカテゴリーで低かった。特に、「連濁」(64%)と「複合語」(63%)では、「語中」(81%)と比較して、/g/の鼻音化頻度が低かった。「連濁」は「複合語」のカテゴリーに比べて鼻音化率が高かったが、その差は統計的に有意ではなかった。助詞と「二字漢語」のカテゴリーでは、基準と比較した場合、鼻音化に有意な影響を与えなかった。鼻音化の割合は、有意な差はないようである(助詞=85%; 語中=81%; 二字漢語=75%)。年齢もまた、/g/の鼻音化の有意な予測因子であった。高年層は、若年層に比べ、軟口蓋鼻音の頻度が有意に高かった。性別では、女性話者の方が男性話者よりも鼻音化の頻度が高かった(84% > 73%)が、この数値差は統計的に有意ではなかった ($p = 0.056$)。また、使用域も/g/の鼻音化において有意な要因ではなかった ($p = 0.705$)。

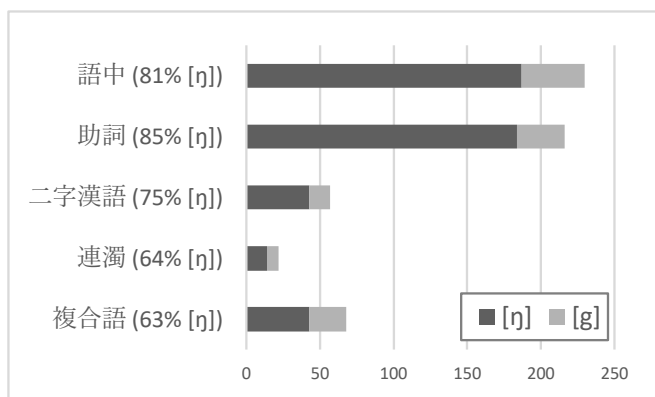


図 10 形態素境界の種類による/g/の鼻音化

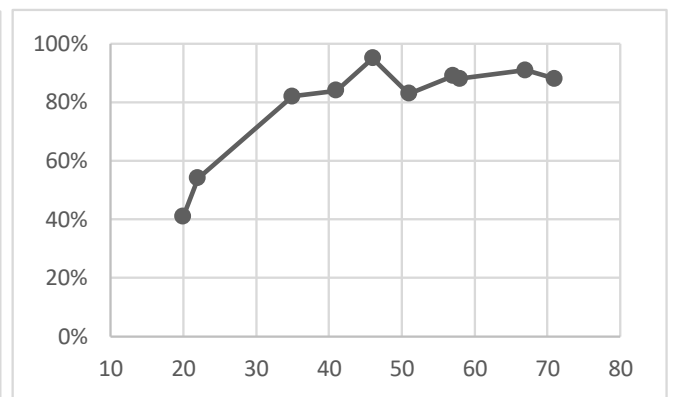


図 11 年齢による/g/の鼻音化率

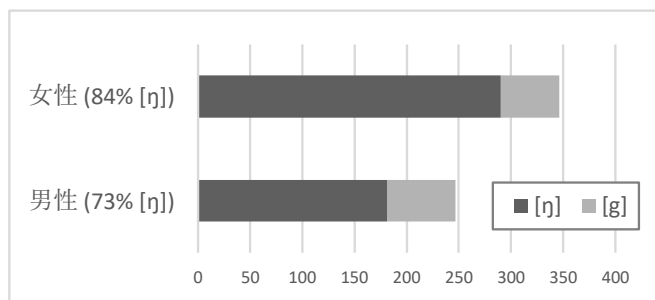


図 12 性別による/g/の鼻音化

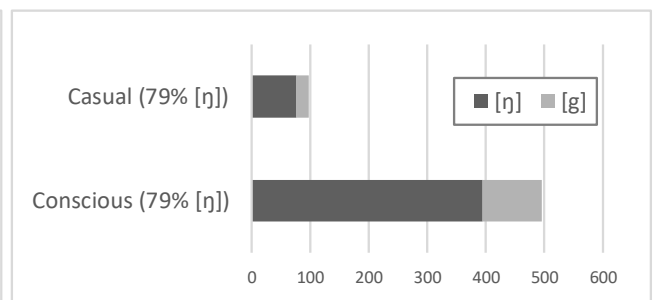


図 13 使用域による/g/の鼻音化

5 考察

調査の結果、津軽方言における鼻音性による清濁対立から鼻音性によらない清濁対立への変化は、東北方言の記述が初めて体系的に行われるようになった 20 世紀中葉頃から大きく進んでいることがわかった。さらに、各音素が複数の要因(形態素境界の種類、年

年齢、性別、使用域)の影響を受けながら、異なった速度で鼻音性によらない清濁対立へと変化していることがわかった。

5.1 /t、k/の有声化

清音子音/t/と/k/の母音間有声化については、/t/の有声化率が/k/の有声化率より低く、/t/の有声化の衰退が/k/より進んでいることがわかった。また、/t/の有声化率が低いこと、/d/の前鼻音化が見られなかったことは、母音間の/t/の[d]から[t]への変化が完了に近い状態にあることを裏付けている。また、/d/の前鼻音化がないことは、前鼻音化された対応音が先に失われて、有声化による区別に移行しているという考えを支持する。/t/に比べ、/k/は変化が遅れている。これは、調音的な要因(軟口蓋音は共同調音による有声化の影響を受けやすい)や鼻音化された対応音[j]の存在に影響されている可能性がある。

年齢は、/t/の有声化については有意な因子であったが、/k/の有声化については有意な因子ではなかった。意外なことに、/t/と/k/の有声化は、高年層の話者において少なかった。この結果をさらに詳しく見てみると、年齢と使用域の相互作用が疑われる。それぞれの使用域について年齢によるパターンを別々に見てみると、高年層は意識的な発話よりもカジュアルな発話で有声化の割合が高いが、若い話者は使用域による変化が見られないか、場合によっては有声化の割合が高いことがわかった。このような変化パターンは、他の個人差(方言に対する態度など)が関与している可能性が高いと考えられる。

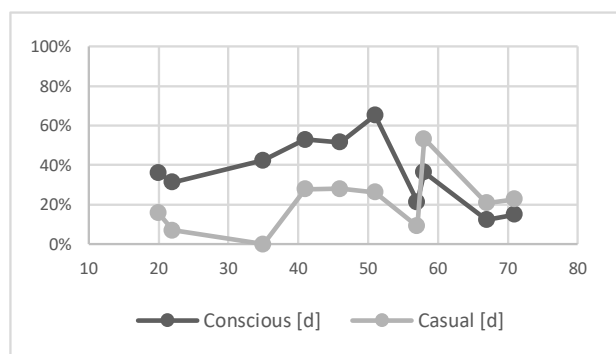


図 14 各使用域の年齢による/t/の有声化

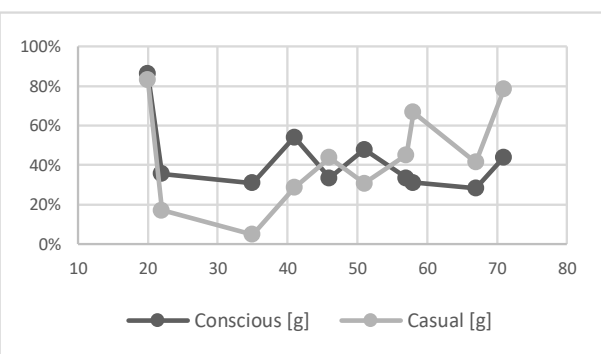


図 15 各使用域の年齢による/k/の有声化

5.2 /g/の鼻音化

/d/と/g/の母音間鼻音化については、どの話者も/g/の鼻音化率が高かったが、/d/の鼻音化率は極めて低く、現代ではほとんど失われていることがわかった。/g/の鼻音化は年齢とは関係なく、/t/と/k/の有声化より遥かに多く見られたが、若年層においては鼻音化率が中高年層より全体的に低く、/g/の鼻音化の衰退も始まっていることが明らかになった。境界の種類などの言語学的要因が、/g/鼻音化のバリエーションに大きく影響していることが確認できた。日比谷の東京での研究でも見られたように、助詞、とりわけ、主格助詞「が」が鼻音化する割合が高かった。一方、性別や使用域は、/g/鼻音化のバリエーションの要因ではなかった。したがって、/g/の鼻音化の減少は、内的要因に比べ、外的要因の影響が少ない可能性がある。これは日比谷が東京方言に対して得られた結果とは異なる。東北部で

も、母音間の/g/が[n]から[g]へと変化し始めていると考えられるが、その動機をよりよく理解するためには、他の要因も調査する必要がある。

6 まとめと課題

以上をまとめると、津軽方言の清濁対立は、鼻音性によるものから鼻音性によらないものへとほぼ完全に進んでいることがわかった。また、言語内的・外的要因を分析に取り入れることで、日本語における鼻音性による清濁対立から鼻音性によらない清濁対立への変化は、複数の段階を経て起きるものであるという仮説を支持することができた。

本研究では、使用域を変数として操作することで、話者自身の発話に対する意識を変動要因として考慮したが、聞き手、津軽弁、他の方言などに対する意識・態度はコントロールできなかった。今後の課題として、改めてオーディエンス・デザイン (audience design) と津軽弁や方言に対する意識と態度という外的要因も含めて調査する必要がある。これらの要因の影響を理解することで、鼻音性による清濁対立から鼻音性によらない清濁対立への変化をより深く理解することができるであろう。

参考文献

- 大橋 純一 (2002) 『東北方言音声の研究』おうふう
- 黒木 邦彦 (2017) 「Correlation between Voicing and Nasalization of Japanese Obstruents」『トークス = 神戸松蔭女子学院大学研究紀要 言語科学研究所篇』20, pp.61–68.
- 日比谷 潤子 (1999) 「Variationist sociolinguistics」『The Handbook of Japanese Linguistics』Wiley, pp. 101-120.
- 此島 正年(1982) 「青森県の方言」『講座方言学 4-北海道・東北地方の方言-』国書刊行会, pp. 213-236.
- Frellesvig, Bjarke (2010) 『*A History of the Japanese Language*』 Cambridge University Press
- Irwin, Mark & Zisk, Matthew (2019) 『*Japanese Linguistics*』 Asakura Publishing
- Vance, Timothy (2008) 『*The Sounds of Japanese*』 Cambridge University Press
- Wenck, Günther (1954-1959) 『*Japanische Phonetik*, Band I-IV』 Otto Harrassowitz
- Zisk, Matthew (2023) 「Classical and Modern Japanese Glossing Rules」
(https://www.academia.edu/92091743/Classical_and_Modern_Japanese_Glossing_Rules_2023_08_20_)

滋賀県大津市方言のウ音便と母音長交替

佐々木 冠¹

1. はじめに

滋賀県大津市で話されている方言では動詞や形容詞で生じるウ音便の結果が長母音で現れたり短母音で現れたりする。(1)の下線部を参照されたい。

(1)「買った」[ko:ta]、「笑った」[warota]、「なくなった」[no:natta]、「赤くなった」[ako natta]

西日本の複数の方言においてウ音便の結果で母音長交替がみられることは 20 世紀半ばにはすでに知られていた(梅垣 1962)。この母音長交替については、長母音を基本とする短母音化分析と短母音を基本とする長母音化分析が提案されており、近年では母音長交替が韻脚構造に動機づけられたものであるとする分析も提案されている。

本発表で扱う滋賀県大津市方言については、佐々木(2023)がウ音便と母音長交替について分析を提案している。佐々木(2023)によると、動詞のウ音便に関して短母音化分析、形容詞のウ音便に関して長母音化分析が有効であるという。しかしながら、ウ音便が生じ得る構造を網羅的に扱ったものではないため分析の妥当性を検証する必要がある。

本発表では、2001 年 8 月 27 日生まれで言語形成期を滋賀県大津市で過ごした男性を対象に 2022 年 11 月から 12 月にかけて行った調査と追調査²で得たデータをもとに、この調査協力者の個人語において動詞のウ音便と母音長交替に関してどのような分析が成立するか検討する。本発表で「滋賀県大津市方言」として言及するものは調査協力者の個人語である。ウ音便と母音長交替のあり方に関して社会言語学的な変異が存在することは否定できないが、ここでは考察の対象としない。本発表で分析の対象とする構造は、動詞に関してはテ形関連語形、形容詞に関しては連用形に「なる」、「ない」、接尾辞/-te/、副助詞が後接する構造である。これらの多様な構造で生じるウ音便を網羅的に記述するには、動機付けは異なるものの、動詞と形容詞の両方で短母音化分析が妥当であることを明らかにする。

ウ音便で生じる母音融合をどのように分析すべきかという問題は自然言語の音韻構造を考える上で重要な問題である。しかし、本発表ではウ音便と母音長交替の關係に集中するためこの問題に深く立ち入らないことにする。³

¹ ささき かん(立命館大学) k-sasaki@fc.ritsumei.ac.jp

² 長い時間を割いて調査に付き合ってくくださった小川丈瑠氏に感謝する。

³ 本発表で用いる用語と表記について述べる。五段活用動詞、連用形、シク活用などの学校文法の用語を用いるが、便宜的なものである。動詞語幹のモーラ数は連用形のモーラ数を反映するものとする。形容詞語幹のモーラ数は非過去接尾辞/-i/を取り除いた形式のモーラ数を反映するものとする。音節境界は「|」で示し、韻脚は「()」で、削除対象は「<>」で囲むことにする。長母音は先行研究の引用を除き「V:」で表す。「C」は子音、「V」は母音を表す。附属形式(語幹と接辞、服部 1950)の境界は「-」で示す。

2. 先行研究

近畿地方の方言のウ音便に母音長交替があることは 20 世紀半ばの伝統方言を扱った文献ですでに指摘されている。榎垣（1962）は、奈良県南部ではウ音便が長母音でだけ実現するが、近畿地方の多くの地域で 2 モーラ語幹ワ行五段活用動詞でウ音便が長母音で実現しそれより長い語幹のワ行五段活用動詞では短母音で実現することを指摘している。

ウ音便における母音長交替には、長母音を基本とする短母音化分析と短母音を基本とする長母音化分析がある。近畿地方の方言を扱った先行研究で短母音分析が見られるものとしては、京都市方言を扱った松丸（2014）が挙げられる。長母音化分析をとる研究としては、滋賀県長浜市方言を扱った酒井（2014）、大阪府八尾市方言を扱った野間（2014）、兵庫県神戸市方言を扱った酒井（2017）が挙げられる。

ウ音便における母音長交替を分析する上で重要なのは、ワ行五段活用動詞の語幹が 3 モーラ以上の場合常に短母音で実現するかどうかである。この点について、京都府京都市方言を扱った中井（2001: 25）は「ワア行ウ音便は 2・4 拍が長く、3 拍が短いのが原則。3 拍については「払う」はハロタが普通でハロータは文章語的」と指摘している。奇数拍語幹の動詞でだけ短母音が生じる状況は、2 モーラ韻脚の関与を示唆する。

近畿地方の方言の先行研究ではないが、上記の京都市方言と同様に偶数モーラ語幹の動詞で長母音が生じ奇数モーラ語幹の動詞で短母音が生じる福岡県八女市黒木方言を分析した加藤・井手口（2018）は、ウ音便（黒木方言の場合イ音便も）における母音長交替を説明するために 2 モーラ韻脚を使った分析を提案している。加藤・井手口（2018: 112）によれば、黒木方言では動詞の左端から 2 モーラ韻脚が形成され、ウ音便が生じた形式が「遊んで」(aso)ode のように「韻脚外の母音」がある（つまり、韻脚が音節を分割する）場合に母音削除が適用され(aso)de のように短母音が生じるが、「飛んで」(too)de のように「韻脚外の母音」がない場合は長母音のまま実現する。加藤・井手口（2018）の分析は韻脚構造に動機付けを見いだす短母音化分析と言える。

佐々木（2023）は、滋賀県大津市方言のウ音便について動詞に関しては短母音化分析が妥当で形容詞に関しては長母音化分析が妥当であるとする分析を提案した。大津市方言は、動詞のウ音便に関して、中井（2001）が記述した京都市方言と同様の性質を示すことを明らかにし、加藤・井手口（2018）を修正した分析を提案した。一方、形容詞については、「なる」に先行する形容詞連用形を例に、1 モーラ語幹でウ音便が長母音で実現するが、それより長い場合は語幹のモーラ数が奇数か偶数かに関わりなく短母音になることから、連用形接尾辞をそれ自体で音節量を担わない/-w/であるとし、長い形容詞で生じる短母音が基本で 1 モーラ語幹形容詞で生じる長母音 (jo: nat-ta) は韻律的最小性 (Ito 1990) によって音節量が増大した結果であると分析した。

形容詞の連用形は広い用法を持つ語形である。しかし、佐々木（2023）は形容詞の連用形に「なる」が後接する構造だけを問題にしたため、ウ音便と母音長交替の関係を体系的に

示すことに成功していない。本発表第4節に示すように、形容詞のウ音便における短母音の分布は佐々木（2023）の分析が予測するところよりも限定的である。本発表では佐々木（2023）が扱わなかった/i/で語幹が終わる形容詞や接尾辞/-te/や副助詞が形容詞連用形に後接する構造についてもデータを示し、それらをどのように分析すべきか考察する。

3. 動詞のウ音便

滋賀県大津市方言でウ音便が生じる環境はワ行五段活用動詞のテ形関連語形（テ形、過去形、トル形など）と形容詞の連用形である。この節では、ワ行五段活用動詞のウ音便と母音長交替について考察する。母音長交替における韻脚の関与を調べるため、語幹が2モーラから4モーラのワ行五段活用動詞のテ形関連語形を調査した。(2)に語幹が複合動詞ではないワ行五段活用動詞の過去形のデータを示す。

(2) 2 モーラ語幹動詞

「買う」/kaw-/ : ko:ta, *kota

「言う」/iw-/ : ju:ta, *juta

「酔う」/jow-/ : jo:ta, *jota

「吸う」/suw-/ : su:ta, *suta

3 モーラ語幹動詞

「笑う」/waraw-/ : *waro:ta, warota

「思う」/omow-/ : *omo:ta, omota

「振るう」/huruw-/ : φuru:ta < φuruta

4 モーラ語幹動詞

「争う」/arasow-/ : araso:ta, *arasota

「失う」/usinaw-/ : ueino:ta, *ueinota

(2)からウ音便により、語幹末の/aw/および/ow/が[o:]または[o]、/uw/が[u:]または[u]になることがわかる。ウ音便と母音長交替の関係について、(i) ワ行五段活用動詞のテ形関連語形は、「買う」「支払う」などの偶数モーラ語幹動詞ではウ音便によって長母音しか現れないが、「払う」などの奇数モーラ語幹動詞では短母音が現れ得るという一般化を導くことができる。これは中井（2001）が京都市方言に関して指摘したのと同様の性質である。語幹末が/uw/の奇数モーラ語幹動詞で許容度に差はあるものの短母音と長母音の両方が現れるため、「現れ得る」という表現をとった。

ウ音便と母音長交替の関係を長母音化として捉える分析では、2モーラ語幹動詞について韻律的最小性（Ito 1990）などによる説明を試みることはできるが、4モーラ語幹で長母音が生じることについては説明が困難である。(i)の状況を説明するには、ウ音便と母音長交替の関係を韻脚構造に動機付けられた短母音化ととらえる分析が有効である。短母音化分析では、3モーラ語幹ワ行五段活用動詞で語幹末母音が短母音で現れるのは、(3)に示すように2モーラ韻脚によって長母音を含む重音節が分割される構造を回避するために短母音化した結果と考えることができる。ウ音便と短母音化の関係を規則の順序づけによって捉えるべきか制約による並列的あるいは順列的評価によってとらえるべきかという問題にはここでは立ち入らない。

(3) /CVCVwi-ta/ → (CV.CV.)<:->-(ta), *(CV.CV)(:-ta)

韻脚構造に動機付けられた短母音化分析は形態的に複雑な語幹を持つワ行五段活用動詞の分析にも有効である。(4)に「払う」を含む3つの動詞の過去形を示した⁴。(4)から奇数モーラ語幹動詞では短母音化が生じ、偶数モーラ語幹動詞では短母音化が生じないことがわかる。同様の母音長交替は「習う」や「迷う」の過去形 (/narawi-ta/ [narota], /majowi-ta/ [majota]) と「見習う」や「血迷う」の過去形 (/mi-narawi-ta/ [minaro:ta], /ti-majowi-ta/ [teimajo:ta]) にも見られる。

(4) 3 モーラ語幹「払った」 /harawi-ta/ (ha.ro)(:ta) [(ha.ro)(ta)] (短母音)

4 モーラ語幹「支払った」 /si-harawi-ta/ (ei.ha)(ro:)(ta) [(ei.ha)(ro:)(ta)] (長母音)

5 モーラ語幹「取り払った」 /tori-harawi-ta/ (to.ri)(ha.ro)(:ta) [(to.ri)(ha.ro)(ta)] (短母音)

ただし、5 モーラ語幹動詞「見失う」/mi-usinaw-/の過去形は miucino:ta であって、*miueinota ではない。形態的に単純な動詞のテ形関連語形でウ音便の結果が長母音の場合、複合動詞でも母音の長さが保持される。このことは、形態的に単純な動詞の長母音が関連語形にも反映することを要求する語形間の忠実性制約の関与を示唆するものである。

上述の例以外で短母音化が期待される環境であるにも関わらず短母音化が生じない例としては、(5)に示す語幹にはじめから長母音が含まれているケースがある。(ii) 動詞語幹内部にもともと存在する長母音は短母音化を被らないことがわかる。

(5) 「見通した」 /mi-to:si-ta/ [mito:eita], *(mi.to)(:ei)(ta)→*[mitocita]

入力において第2音節に存在する長母音は、左端からの2モーラ韻脚によって長母音が分割され短母音化が生じることが期待されるが、実際には短母音化を被らない。これは動詞に限ったことではなく、調査協力者の方言においては「砂糖」「弟」のような名詞も[sato:], [oto:to]のように第2音節の長母音が保持される。(ii)の性質から、動詞のウ音便における短母音化が派生環境効果であり、短母音化を規則ととらえるのであれば循環的な性質のもの (Kiparsky 1982) ととらえる必要があることがわかる。また、次の(iii)とも関わるが、2モーラ脚韻が一律に左端から形成されるわけではない可能性を示唆するものでもある。

ウ音便における短母音化は、左端から形成される2モーラ韻脚によって重音節が分割される構造を回避するために生じる現象である。この現象が、派生的環境で生じるのであれば、他の音便によって第2音節に重音節が生じる場合も軽音節化が生じることが期待されるが、実際には以下に示すように音節量が保持される。このように、(iii) ウ音便以外の音便で音節の短縮は生じない。

(6) 促音便: /sodati-ta/ [sodatta], *[soda<t>ta] 撥音便: /hakobi-ta/ [hakonda], *[hako<n>da]

イ音便: /niogi-ta/ [nioida], *[nio<i>da]

(iii)はウ音便以外の音便で語形が導かれる場合に語頭からではなく重音節を起点として

⁴ 佐々木 (2021) の動詞テ形関連語形の分析を採用し過去形の形態素標示は/連用形-ta/とする。この分析では、音便は非過去形との韻律的単一性に動機づけられた語幹末子音もしくは連用形末尾の/i/の脱落とそれに伴う分節音の構造調整の結果と見なされる。

韻脚が形成されることを示唆する。2つの韻脚形成が共存する状況を捉えるには違反可能な制約による説明が有効と考えられるが、分析の詳細については機会を改めて論じたい。また、特殊拍のうち長音のみが調整の対象となるのは長母音が2つのモーラと結びつく唯一の要素 (Hayes 1989) であることが関係している可能性がある。

4. 形容詞のウ音便

この方言の形容詞におけるウ音便は連用形で生じる。長母音と短母音が現れる点は動詞のウ音便と同様だが、その成立条件には違いがある。(iv) 形容詞連用形のウ音便では、1モーラ語幹形容詞で長母音が現れるが、それより長い語幹の形容詞では短母音が現れる。長母音と短母音の出現に関して語幹のモーラ数が奇数であるか偶数であるかは、非関与的である。

- (7) 「よい」の連用形: /jo-u/ → jo: nat-ta (1モーラ語幹形容詞)
「ない」の連用形: /na-u/ → no: nat-ta (1モーラ語幹形容詞)
「赤い」の連用形: /aka-u/ → ako nat-ta (2モーラ語幹形容詞)
「太い」の連用形: /huto-u/ → φuto nat-ta (2モーラ語幹形容詞)
「安い」の連用形: /jasu-u/ → jasu nat-ta (2モーラ語幹形容詞)
「短い」の連用形: /mizika-u/ → miziko nat-ta (3モーラ語幹形容詞)
「賢い」の連用形: /kaciko-u/ → kaciko nat-ta (3モーラ語幹形容詞)
「見やすい」の連用形: /mi-jasu-u/ → mijasu nat-ta (3モーラ語幹形容詞)

(7)のデータは形容詞における短母音化が韻脚の形成とは異なる動機付けを持つことを示唆する。左端からの韻脚の形成が短母音化の動機付けであるならば、「短い」の連用形の韻脚構造は(mizi)(ko:)であり韻脚が音節を分割する構造になっていないので短母音化が生じないことが期待される。しかし、実際には短母音化が生じている。

形容詞の連用形における短母音化の動機付けを考える上で示唆的なのが、連用形が現れる構造の一部に語幹も現れ得ることである。(8)に示すように、「なる」や「ない」の前には連用形だけでなく語幹も現れる。語幹が/o/もしくは/u/で終わる形容詞の場合、語幹と短母音化が生じた連用形が同形なので、ここでは語幹が/a/で終わる形容詞の例を示すことにする。語幹が/i/で終わる形容詞については後述する。なお、「ない」のような1モーラ語幹の形容詞の場合、語幹/na-/が(8)の構造に現れることはない。「なくなった」は noo nat-ta であり、*no nat-ta や*na- nat-ta にはならない。

- (8) 「高い」 {tako:, tako, taka-} nat-ta {tako:, tako, taka-} na-i
「短い」 {miziko:, miziko, mizika-} nat-ta {miziko:, miziko, mizika-} na-i

連用形と語幹がともに現れ得る呼応像では短母音化が生じるが、(v) 連用形だけが現れる構造では短母音化が生じない。(9)と(10)に示すように副助詞や接尾辞/-te/が後接する構造には形容詞語幹は現れることができず、形容詞の連用形だけが現れ短母音化も生じない。

- (9) a. 「高くはなった」 {kako:, *tako, *taka-} wa nat-ta.
 「高くはない」 {tako:, *tako, *taka-} wa na-i.
 b. 「短くはなった」 {miziko:, *miziko, *mizika-} wa nat-ta.
 「短くはない」 {miziko:, *miziko, *mizika-} wa na-i.
- (10) a. 「高くて買えない」 {tako:, *tako, *taka-}-te ka-e-heN.
 b. 「安くて嬉しい」 {jasu:, *jasu-}-te ureei-i.
 c. 「しつこくて嫌い」 {eitsuko:, *eitsuko-}-te kira-i.

語幹と共通の構造に現れる場合にだけ連用形の末尾の母音が短母音化することから、機能的に語幹と近い用法の連用形を対象に語幹との間で韻律上の水平化、すなわち長さを揃えることが生じた結果が形容詞連用形における短母音化と考えることができる。水平化を形容詞連用形における短母音化の要因とする分析は語幹のモーラ数の奇数・偶数の非関与と矛盾しない。また、水平化の結果としての短母音化分析では、(9)と(10)に示したように連用形に副助詞や接尾辞/-te/が後接する際に短母音化が生じないことが期待される。短母音化を誘引する語幹がこの構造には生じないからである。

接尾辞/-te/や副助詞が後接する構造に現れる形容詞の連用形は左端からの韻脚形成を想定した場合に韻脚による音節の分割が生じる構造になっている場合でも短母音化が生じない。「高くて」は左端から韻脚を形成すると(ta.ko)(:te)になるにも関わらず、短母音化を被らない。形容詞連用形が韻脚に動機づけられた短母音化を被らないことから短母音化を伴う左端からの韻脚形成は動詞に固有のものということになる。

1 モーラ語幹形容詞（よい、濃い、ない）の連用形は「なる」や「ない」の前でも短母音化を被らない。これは単語が 2 モーラ以上であることを要求する韻律的最小性（Ito 1990）によるものと考えられる。韻律的最小性は 1 モーラ名詞の長母音化の要因ともなる独立した根拠付けを持つ制約である。(11)に示すように主語や目的語の位置や名詞述語の一部となる場合に 1 モーラ名詞で長母音化が生じる。⁵

- (11) a. me: ita-i（目が痛い） b. me: ut-ta（目を打った） c. ita-i no wa me: ja（痛いのは目だ）

最後に語幹が/i/で終わる形容詞、すなわちシク活用形容詞と「大きい」の連用形のデータを示す。(12)と(13)に示すように副助詞や接尾辞/-te/が後接する構造で長母音で終わる連用形だけが用いられる点は他の形容詞と同様である。一方、これまでに示した形容詞と異なり、(14)に示すように、(vi) 語幹が/i/で終わる形容詞は「なる」「ない」が後接する構造で長母音で終わる連用形と語幹が用いられ、短母音化が生じない。

- (12) a. 「涼しくはない」 {suzueu:, *suzueu, *suzuei-} wa na-i.
 b. 「大きくはない」 {o:kju:, *o:kju, *o:ki-} wa na-i.
- (13) a. 「涼しくて気持ちいい」 {suzueu:, *suzueu, *suzuei-}-te kimotei ee.

⁵ 名詞の長母音化を調べるに当たって松岡葵（2022）「日琉諸方言における最小語制約の調査票(2022 年 9 月 9 日版)」 <https://doi.org/10.5281/zenodo.7064688> を使用した。

- b. 「(字が) 大きくて読みやすい」 {o:kju:, *o:kju, *o:ki-}-te jom-i jasu-i
 (14) 「涼しい」 {suzueu:, *suzueu, suzuei-} nat-ta {suzueu:, *suzueu, suzuei-} na-i
 「大きい」 {o:kju:, *o:kju, o:ki-} nat-ta {o:kju:, *o:kju, o:ki-} na-i

ウ音便に関して短母音化分析をとる立場からすると、(14)に示した語幹が/i/で終わる形容詞の連用形における短母音化の不適用は例外的な現象となる。この例外的な現象の背景にあるのは、構造の有標性ではなく入力や他の語形との間の忠実性と考えられる（音韻現象を有標性制約と忠実性制約の相互作用で捉える分析については Prince & Smolensky 2004 を参照されたい）。短母音で構成される拗音（Cju）を回避して長母音が含まれる拗音（Cju:）が現れる現象は、形容詞の連用形以外には見られないので、短母音で構成される拗音の有標性がこの方言の音韻構造を規定しているとは考えにくい。一方、/Ci-u/が[Cju:]になる現象は/i/のモーラの消失と/u/のモーラ数の増大がある点で、母音のモーラ数の変動がない/Ca-u/→[Co:], /Co-u/→[Co:], /Cu-u/→[Cu:]に比べて入力や他の語形に対する忠実性が低い。そのためさらなる忠実性の低下を回避するために[Cju:]が短母音化を被らなかった可能性がある。

形容詞の連用形に関する議論を締めくくるに当たり、佐々木（2023）の分析を批判的に検証する。第2章で紹介したように、佐々木（2023）は形容詞のウ音便については短母音を基本とする長母音化分析をとる。この分析では形容詞の連用形に関して説明できない現象が2つある。一つは、連用形と語幹の間にゆれが認められない構造、すなわち接尾辞/-te/や副助詞が後接する構造でウ音便の結果長母音が生じることである。これは、語幹の長さが非関与的な現象なので、韻律的最小性による長母音化ととらえることができない。もう一つは、語幹が/i/で終わる形容詞ではどのような構造でもウ音便の結果が長母音になることである。語幹が/i/で終わる形容詞は2モーラ以上の語幹を持つ形容詞なので、ここでも韻律的最小性では長母音の存在を説明できない。また、2モーラ韻脚による長母音化も他の3モーラ語幹形容詞に適用されない以上分析として成立しないことになる。

5. まとめ

本発表では、滋賀県大津市方言におけるウ音便で生じる母音長交替について、短母音化分析が妥当であるとする分析を提案した。ただし、動詞と形容詞では短母音化の動機付けが異なる。短母音化は、動詞の場合、韻脚構造に動機づけられているが、形容詞の場合、同じ構造に出現する語幹との韻律上の水平化に動機づけられている。調査協力者の個人語の分析に限定しても本発表には少なくとも4つの残された課題がある。

/uw/で語幹が終わる奇数モーラ語幹動詞で短母音化が随意的であることについては事実の指摘にとどまった。母音の種類と随意性が関係している以上、随意性の背景にある事情を理解するには、本発表で深入りを避けた母音融合をどのように分析すべきかという問題を避けて通ることができないだろう。

韻脚に動機づけられた短母音化が動詞限定の現象であることについても事実の指摘にと

どまった。この限定の背景にどのような事情があるのか追求することができなかった。日本語の形容詞を動詞と同様用言型とする類型論的研究（松本 2007）もあるが、形容詞語幹が名詞として機能する場合が少なくないことを考えると形容詞には文法的に名詞と通底する部分がある可能性がある。動詞と形容詞の短母音化における違いは品詞論の観点からの分析が必要になるのかもしれない。

短母音化した形容詞連用形の形態統語論上の性格付けも追求できなかった。副助詞の後接が許されないことから独立性の低さが伺われるので、附属形式化している可能性がある。

ウ音便と短母音化の関係を派生的に捉えるべきか非派生的にとらえるべきかという問題も追及していない。動詞における短母音化が派生環境効果であることや形容詞における短母音化が語幹との韻律上の水平化によって生じることについては非派生的な分析が有効と考えられるが、その検証には新たな論考が必要である。

【参考文献】

- 煤垣実編（1962）『近畿方言の総合的研究』三省堂。
- 加藤幹治・井手口将仁（2018）「福岡県八女市黒木方言における子音語幹動詞のテ形派生音韻規則：韻脚を形成しない母音の削除」『日本言語学会第 156 回大会予稿集』109–114.
- 酒井雅史（2014）「滋賀県長浜市方言」方言文法研究会編（2014）, 82–89.
- 酒井雅史（2017）「兵庫県神戸市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集(3) 活用体系(2)』97–104.
- 佐々木冠（2021）「不規則性の衰退：日本語方言の動詞形態法で起きていること」林・衣畑・木部編『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』, 229–258. 開拓社.
- 佐々木冠（2023）「母音短縮と母音延長：滋賀県大津市方言のウ音便」北海道方言研究会第 237 回例会（札幌国際大学, 2023/04/16）.
- 中井幸比古（2001）『京都市方言アクセント小辞典』神戸外国語大学.
- 野間純平（2014）「大阪府方言」方言文法研究会編（2014）, 102–111.
- 服部四郎（1950）「附属語と附属形式」『言語研究』15, 1–26.
- 方言文法研究会編（2014）『全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』方言文法研究会.
- 松丸真大（2014）「京都府京都市方言」方言文法研究会編（2014）, 90–101.
- 松本克己（2007）『世界言語の中の日本語：日本語系統論の新たな地平』三省堂.
- Hayes, B. (1989) Compensatory lengthening in moraic phonology. *Linguistic Inquiry* 20. 253–306.
- Ito, J. (1990) Prosodic minimality in Japanese. *CLS* 26. 213–240.
- Kiparsky, P. (1982) Lexical phonology and morphology. In: The Linguistic Society of Korea (ed.), *Linguistics in the morning calm*, 3–91. Seoul: Hanshin.
- Prince, A. & P. Smolensky (2004) *Optimality theory: Constraint interaction in generative grammar*. Malden, MA, and Oxford: Blackwell.

《方言関係新刊書目》(116号につづく)

国立国語研究所研究図書室が2023年4月以降に受け入れた図書の中から、2017年以降の刊行物を選びました。なお、同図書室目録に未記載の文献でも、内容を確認したものは掲載しました。

お気づきの点は、日本方言研究会事務局

〒370-1193 群馬県佐波郡玉村町上之手 1395-1 群馬県立女子大学文学部国文学科 気付

hougen-jim@e-mail.jp

までお知らせください。

▼波照間方言語彙集：五十音順（方言索引・共通語索引）

本田昭正編，[本田昭正]，114p+地図-26cm.

2019(H31)年

▼福井三型アクセント資料集：福井県嶺北地方沿岸部のアクセント分布（平成28年-平成30年度科学研究費基盤研究C（課題番号：16K02722））

松倉昂平，新田哲夫著，[新田哲夫]，93p+挿図+地図-30cm.

2020(R02)年03月

▼言語地理学視域中的宁波方言比较研究

赵则玲著，北京：中国社会科学出版社，2+4+316p+挿図+地図-24cm.

2022(R04)年08月

▼「渡辺清絵日記」の世界：明治・大正期ある農民の記録

中野英男編著，さくら市ミュージアム―荒井寛方記念館―，103p+図版8p+挿図-30cm.

2022(R04)年11月

▼福岡・九州の災害地名：語源と地形から読み解く警告

池田善朗著，忘羊社，172p+図版[1]枚-19cm.

2022(R04)年11月

▼漢日上海方言会话集

丁卓著，钱乃荣编，上海：上海译文出版社，xiv+xxviii+545p-22cm.

2022(R04)年11月

▼アイヌの時空を旅する：奪われぬ魂

小坂洋右著，藤原書店，347p+挿図+地図-20cm.

2023(R05)年01月

▼台湾語と文字の社会言語学：記述的ダイグラフィア研究の試み

吉田真悟著，三元社，vii+236p-22cm.

2023(R05)年01月

▼「フランコプロヴァンス語」は存在するか：フランス・イタリア・スイスの国境を越える言語の再活性化と言語意識：フランスの地域を中心に

佐野彩著，三元社，xi+423p-22cm.

2023(R05)年02月

▼江戸時代京都名所事典：古地図で辿る都の今昔

島村幸忠著，笠間書院編集部編，笠間書院，301p+挿図+地図-21cm.

2023(R05)年02月

▼獲得と臨床の音韻論（ひつじ研究叢書（言語編）第195巻）

上田功著，ひつじ書房，viii+154p+挿図-22cm.

2023(R05)年02月

▼カリフォルニア州における言語マイノリティ教育政策に関する研究：多言語社会における教育統治とオルタナティブな教育理念の保障

- 滝沢潤著, 多賀出版, vii+307p+挿図-22cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼芸人国語
- アイデンティティ [ほか] 著, KADOKAWA, 125p-19cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼言語文化とコミュニケーション シリーズ総合政策学をひらく
- 宮代康丈, 山本薫編, 今井むつみ [ほか著], 慶應義塾大学出版会 (発売), vi+265p+挿図-22cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼後期江戸語の行為要求表現: 言語の歴史的研究の意義と評価
- 福島直恭著, 花鳥社, iii+179p+挿図-21cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼語用論的方言学の方法 (ひつじ研究叢書 (言語編) 第 191 巻)
- 小林隆著, ひつじ書房, xix+567p+挿図+地図-22cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼澤川物語: 民俗と方言
- 澤田宏著, 桂書房, 238p+挿図+地図-30cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼中世社会と声のことば
- 酒井紀美著, 吉川弘文館, 7+319+15p-22cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼都市空間の言語生態: 上海の言語景観と道路命名の歴史 (神奈川大学言語研究センター叢書 2)
- 彭国躍著, くろしお出版, xi+223p+挿図-22cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼年を重ねたからこそできる方言での社会貢献: 「方言を語り残そう会」の場合 (令和 4 年度文化庁東日本大震災被災地方言の記録作成及び啓発事業)
- 櫛引祐希子編, 東北大学方言研究センター, 53p-26cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼日本語の発音はどう変わってきたか: 「てふてふ」から「ちょうちょう」へ、音声史の旅
- 釘貫亨著, 中央公論新社, iv+242p+挿図-18cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 (文化庁委託事業報告書)
- 東北大学方言研究センター編, 東北大学大学院文学研究科国語学研究室, 90p+挿図-30cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼閩南地区方言地図集
- 洪惟仁作, [臺北]: 臺灣語文學會, 383p+地図-30cm. 2023 (R05) 年 02 月
- ▼アジア英語における口語表現の比較: コーパスにもとづく分析
- 高橋真理子著, ナカニシヤ出版, v+219p-挿図-22cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼味わい、愉しむきほんの日本語: あいさつ・しきたり・四季・ことわざ
- 齋藤孝著, 実務教育出版, 223p+挿図-21cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼出雲国風土記: 校訂・注釈編
- 島根県古代文化センター編, 八木書店 (発売), xviii+712p+図版 [4] p-22cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼茨城県南東部地域における特徴的方言とその変容に及ぼす移住者増に関する研究 (平成 28 年-令和 4 年度科学研究費基盤研究 C (課題番号: 16K02717))
- 研究代表者 杉本妙子, [杉本妙子], 118p-30cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼ウアイヌコロコタンアカラウボポイのことばと歴史

- 国立アイヌ民族博物館編, 国書刊行会, 214p+図版 [8] p+挿図-21cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼上田万年再考：日本言語学史の黎明
長田俊樹著, ひつじ書房, xii+305p-22cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼エウエンキー語音声資料 (北方言語研究別冊 1、ツングース言語文化論集 71)
山田祥子採録・編集, 富山大学人文学部, 106p-26cm + CD1 枚 (12cm). 2023 (R05) 年 03 月
- ▼越境する民：近代大阪の朝鮮人史 (岩波現代文庫：学術 463)
杉原達著, 岩波書店, vi+300p+挿図+地図-15cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼えふりこぎ
仙道富士郎著, 時事通信社 (発売), 259p-19cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼大人ことば辞典：しみる・エモい・懐かしい
ことば探究舎編, 青春出版社, 222p-19cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼現代日本語の存在を表す諸表現：「アル」「イル」「テイル」「テアル」(人文科学の一流的研究を目指す博士論文叢書 11)
渡辺誠治著, 日中言語文化出版社, iii+119p-21cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼コミュニケーションの社会心理学：伝える・関わる・動かす
岡本真一郎編, ナカニシヤ出版, iv+218p-21cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼山地と人間
専修大学文学部環境地理学科編, 専修大学出版局, 265p+挿図+地図-19cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼周縁資料と言語接触研究 (東西学術研究所研究叢書：第 12 号)
奥村佳代子編著, 遊文舎, iii+186p+挿図-21cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼新編立川市史：資料編：先史
立川市史編さん先史部会編集, 立川市, xxvi+602p+図版 [8] p+挿図-27cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼知と奇でめぐる近世地誌：名所図会と諸国奇談
木越俊介著, 平凡社, 109p+挿図+地図-21cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼日本言語文化の内と外 (東西学術研究所研究叢書：第 15 号)
村田右富実編著, 遊文舎, iv+144p+挿図-21cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼春野の民話
奥理咲子 [ほか] 編著, 三弥井書店, 170p+挿図+肖像+地図-21cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼フィールドワークという探索活動の可能性 (弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター教育研究プロジェクト「研究におけるフィールド調査の重要性」に関する多分野横断型研究」報告書)
葉山茂編, [弘前大学人文社会科学部：弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター], 107p+挿図-26cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼ふるさとのことば：倉吉弁：メディアと研究の狭間で
桑本みつよし, 桑本裕二著, 山陰中央新報社, 177p+挿図-18cm. 2023 (R05) 年 03 月
- ▼ベトナム語北部方言の音節論：音声から音韻へのアプローチ (プリミエ・コレクション 125)
山岡翔著, 京都大学学術出版会, xvii+308p+挿図-22cm. 2023 (R05) 年 03 月

▼目でみる方言

岡部敬史文, 山出高士写真, 東京書籍, 175p-15×20cm. 2023 (R05) 年 03 月

▼4 コマ仙台弁こけし仙台宮城方言まるわかり BOOK

jugo 著, 小林隆監修, 小学館, 127p-19cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼Place naming, identities and geography : critical perspectives in a globalizing and standardizing world

Gerry O'Reilly, editor, Cham : Springer, xviii+659 p.+ill. (chiefly col.)-24cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼Sociopragmatics of Japanese : theoretical implications (Routledge research in pragmatics)

Yasuko Obana and Michael Haugh, Abingdon ; New York : Routledge, [xiii]+224 p.+ill.-24cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼アイデンティティと言語学習 : ジェンダー・エスニシティ・教育をめぐって広がる地平

ボニー・ノートン著, 中山亜紀子, 福永淳, 米本和弘訳, 明石書店, 309p-22cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼イン/ポライトネス : からまる善意と悪意

滝浦真人, 椎名美智編, 阿部公彦 [ほか執筆], ひつじ書房, iv+267p+挿図-21cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼インタビュー調査法入門 : 質的調査実習の工夫と実践

山口富子編著, ミネルヴァ書房, vii+242p-21cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼おかしんだいねえ! 甘楽弁の世界 : 知りゃあ知るほど不思議な上州弁 2

ながれてんせい著, 文芸社, 174p+挿図-21cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼変わる日本語、それでも変わらない日本語 : NHK 調査でわかった日本語のいま

塩田雄大著, 世界文化社, 255p+挿図-19cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼言語沼 : 言語オタクが友だちに 700 日間語り続けて引きずり込んだ

堀元見, 水野太貴著, あさ出版, 207p-19cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼三省堂国語辞典から消えたことば辞典

見坊行徳, 三省堂編修所編著, 三省堂, 240+16p+図版 [5] 枚-19cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼政治言語の研究 : 日本人の思考様式と言語生活

佐々木健悦著, 社会評論社, 268p-19cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼地図は語る : データがあぶり出す真実

ジェームズ・チェシャー, オリバー・ウベルティ著, 梅田智世, 山北めぐみ訳, 日経 BP マーケティング (発売), 216p-25cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼利根川河口地域言語地図 : 1981 年の調査資料をもとに

真田信治 [ほか] 編, 都染直也, 153 枚+挿図+地図-21×30cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼優しいコミュニケーション : 「思いやり」の言語学 (岩波新書 : 新赤版 1971)

村田和代著, 岩波書店, vii+205+6p+挿図-18cm. 2023 (R05) 年 04 月

▼ウズベク移民と日本社会

- ティムール・ダダバエフ, 園田茂人編, 東京大学出版会, vii+168p+挿図+地図-22cm.
2023 (R05) 年 05 月
- ▼エレガントな毒の吐き方：脳科学と京都人に学ぶ「言いにくいことを賢く伝える」技術
中野信子著, 日経 BP マーケティング (発売), 269p-18cm. 2023 (R05) 年 05 月
- ▼女ことばってなんなのかしら? : 「性別の美学」の日本語 (河出新書 063)
平野卿子著, 河出書房新社, 213p-18cm. 2023 (R05) 年 05 月
- ▼言語の本質：ことばはどう生まれ、進化したか (中公新書 2756)
今井むつみ, 秋田喜美著, 中央公論新社, ix+277p+挿図-18cm. 2023 (R05) 年 05 月
- ▼方言地理学の視界
小林隆, 大西拓一郎, 篠崎晃一編, 勉誠社, 7+400p+挿図-22cm. 2023 (R05) 年 05 月
- ▼ワークブック方言で考える日本語学
松丸真大, 白岩広行, 原田走一郎, 平塚雄亮著, くろしお出版, 145p-26cm. 2023 (R05) 年 05 月
- ▼Linguistic landscapes : a sociolinguistic approach
Jeffrey L. Kallen, Cambridge : Cambridge University Press, xxvi+350 p.+ill.-24cm.
2023 (R05) 年 06 月
- ▼Meaning, identity, and interaction : sociolinguistic variation and change in game-theoretic pragmatics
Heather Burnett, Cambridge : Cambridge University Press, xxi+209 p.+ill.-24cm.
2023 (R05) 年 06 月
- ▼奄美群島植物目録
田畑満大著, 南方新社, 246p-26cm. 2023 (R05) 年 06 月
- ▼オープンデータと QGIS でゼロからはじめる地図づくり
青木和人著, 講談社, vii+231p-24cm. 2023 (R05) 年 06 月
- ▼ききがき大阪北摂すいたの民話
阪本一房ききがき, 藤本衛編・解説, 西日本出版社, 175p+挿図-19cm. 2023 (R05) 年 06 月
- ▼國語史と文獻資料 (小林芳規著作集 : 第 4 卷)
小林芳規著, 汲古書院, 10+464p+挿図-22cm. 2023 (R05) 年 06 月
- ▼コレモ日本語アルカ? : 異人のことばが生まれるとき (岩波現代文庫 : 学術 467)
金水敏著, 岩波書店, vi+253+24p+挿図-15cm. 2023 (R05) 年 06 月
- ▼中国のことばの森の中で : 武漢・上海・東京で考えた社会言語学 (リベラルアーツコトバ双書 3)
河崎みゆき著, 教養検定会議, viii+155p-18cm. 2023 (R05) 年 06 月
- ▼日本語が消滅する (幻冬舎新書 694)
山口仲美著, 幻冬舎, 302p-18cm. 2023 (R05) 年 06 月
- ▼ハカセのこうしゃっぺえ話 : ヒーローは人間の生命に寄りそう
山本博士著, アスパラ社, 227p+挿図-19cm. 2023 (R05) 年 06 月
- ▼読み書きの日本史 (岩波新書 : 新赤版 1978)

- 八鍬友広著, 岩波書店, ix+235+10p+挿図-18cm. 2023 (R05) 年 06 月
- ▼Dialect, voice, and identity in Chinese translation : a descriptive study of Chinese translations of Huckleberry Finn, Tess, and Pygmalion
Jing Yu, Abingdon ; New York : Routledge, [vii]+225 p.+ill.-24 cm. 2023 (R05) 年 07 月
- ▼The power of voice in transforming multilingual societies (Critical language and literacy studies29)
edited by Julia Gspandl ... [et al.], Bristol : Multilingual Matters, xxvi+238 p.+ill.-24cm. 2023 (R05) 年 07 月
- ▼あなたの日本語だいじょうぶ? : SNS 時代の言葉力
金田一秀穂著, 暮しの手帖社, 275p-19cm. 2023 (R05) 年 07 月
- ▼決定木分析による言語研究
玉岡賀津雄著, くろしお出版, 300p-21cm. 2023 (R05) 年 07 月
- ▼言語学小辞典
下宮忠雄著, 文芸社, 199p-18cm. 2023 (R05) 年 07 月
- ▼佐野弁ばんざい
森下喜一著, 随想舎, 208p-19cm. 2023 (R05) 年 07 月
- ▼戦時用語の基礎知識
北村恒信著, 潮書房光人新社, 396p+挿図-16cm. 2023 (R05) 年 07 月
- ▼読み書きの民俗学 (日本歴史民俗叢書)
渡部圭一著, 吉川弘文館, 10+352+7p+挿図-22cm. 2023 (R05) 年 07 月
- ▼「書くこと」の一九世紀明治 : 言文一致・メディア・小説再考
山田俊治著, 岩波書店, viii+408+6p+挿図-22cm. 2023 (R05) 年 08 月
- ▼近代日本メディア史 1 : 1868-1918
有山輝雄著, 吉川弘文館, 16+365+11p+挿図+肖像-22cm. 2023 (R05) 年 08 月
- ▼古本節用集の総合的研究
高橋忠彦, 高橋久子著, 武蔵野書院, 1512p+22cm. 2023 (R05) 年 08 月
- ▼種明かししない柳田国男 : 日本民俗学のために
福田アジオ著, 吉川弘文館, viii+249+xip-20cm. 2023 (R05) 年 08 月
- ▼近代日本メディア史 2 : 1919-2018
有山輝雄著, 吉川弘文館, 9+405+13p+挿図+肖像-22cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼日本列島における生活語の音響分析 : 中舌母音について
今石元久著, 広島音声言語研究所, 3+141p+挿図+地図-30cm + DVD-R2 枚. 2023 (R05) 年 09 月
(担当 : 山岡華菜子)

— お 知 ら せ —

〈次回のお知らせ〉

次回の第 118 回の研究発表会は、**2024 年 5 月 31 日（金）**（日本語学会春季大会前日）に東京にて現地開催の予定です。

〈発表募集〉

1. 応募資格・条件：方言研究に関心をお持ちの方なら、どなたでも応募することができます。研究発表は、日本語方言とその関連領域に関する未発表のものとし、1 題につき発表 30 分、質疑 20 分（予定）です。
2. 応募締切：**2024 年 2 月 22 日（木）** 必着
3. 応募書類：次の 2 点（A4 判用紙計 2 枚）をご提出ください。
 - a. 申込書：A4 判用紙 1 枚に、発表題目・氏名・所属・研究略歴・連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）を記載してください。
 - b. 発表要旨：冒頭に発表題目を記した上で、研究の目的・方法・結論を具体的に明記してください。氏名・所属は記載せず、本文においても応募者が特定できるような表現を避けてください。分量は、図表等込みで A4 判用紙 1 枚以内です。
4. 応募先と応募方法：下記連絡先①（研究発表会委員会）宛に、メールの添付ファイル（Microsoft Word もしくは PDF）でお送りください。その場合、特殊な記号を使うなど、文字化けが予想される場合には、プリントアウトしたものをスキャンした形で PDF ファイルをお送りください。
5. 応募可能数：筆頭発表者として応募できるのは 1 件です。応募書類の提出者を筆頭発表者として扱います。
6. その他：研究発表会委員会で審査の上、採否を決定します。採用決定後、発表題目、発表者名（連名発表の場合、氏名の順序も）は変更できません。採用された方には、**2024 年 4 月 30 日（火）**までに発表原稿集の原稿を提出していただきます。その他、詳細はホームページをご覧ください。

連絡先①

研究発表会委員会（委員長：大橋純一）
〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町 1-1
秋田大学教育文化学部
地域文化学科気付
hougen-happyou@e-mail.jp

連絡先②

事務局（総務委員長：新井小枝子）
〒370-1193 群馬県佐波郡玉村町上之手 1395-1
群馬県立女子大学文学部
国文学科気付
hougen-jim@e-mail.jp

日本方言研究会ホームページ <http://dialectology-jp.org/>

Conference Papers of the Dialectological Circle of Japan

No.117 (October 21, 2023), online

Presentation

1. MOLARIUS Milla: Dialect in LINE chat conversations of youth from the West Mino area of Gifu prefecture
2. TOGI Yuta: The referential range and typicality of *kōko*, a word for a type of pickles in the Toyoshima dialect of Kure city, Hiroshima prefecture: With a focus on occupational variation
3. TSUBOI Nao: A diachronic consideration of the honorific form (*ya*)*nsu* in Nagahama city, Shiga
4. NOMA Jumpei: The function of *da* in the Izumo dialect compared with *noda*
5. CHICO Sayumi: An analysis of language-internal and language-external factors affecting the “sei-daku” distinction in the modern Tsugaru dialect
6. SASAKI Kan: U-euphony and vowel-length alternation in the Ōtsu dialect of Shiga prefecture